
東方夢桜歌 ~A little tenderness and some courage~

REN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方夢桜歌 A little tenderness and
some courage

【ZPDF】

Z8001Y

【作者名】

REN

【あらすじ】

ある日、とある少年が世界から姿を消した。少年が田を見ましたとき、そこは自分がいた世界ではなかった。そこは、忘れられた者たちが集う楽園。少年は、そこで生きることを決意する。少年は何を想い生きていくのか、少女たちはどのように少年を受け入れるのか。これは、楽園で生きることを決意した少年とその楽園の少女たちの物語。

注：これは東方Projectの一次創作です。苦手な方は見ない
ことをお勧めします。

なお、この小説の作者はド素人です。また、投稿も気分しだいです。
それでも、暇つぶし程度になればと思っています。

主人公設定（前書き）

はじめまして、RENともうします。今回はこの物語の主人公の設定です。

主人公設定

名前：一狂咲 彩人 くるいざき あやと

年齢：17歳

身長：175cm 体重：60？

細身だが程よく引き締まっている

趣味：料理、読書、ギター（歌も含む）

容姿

黒髪黒目で上の中くらい。感情が昂ぶると目が金色になる特異体质。

性格

基本的に温厚だが子供っぽさが抜けでおらず時たま悪戯をする。めったな事では怒らないが怒ると怖い。

自分が面白そうとthoughtに首を突っ込みますにはいられずに、そのせいでケガをすることもしばしば。好き嫌いがはつきりしていく、気に入った相手が困つたりしていると何かと手伝ってくれる。が必要以上には手を貸さない。嫌いな相手や興味の無い相手は基本的に無視。なぜか、子供や動物には異常なほど懐かれる。ネコ好き。炊事、洗濯などそつなくこなせるくらいには器用。

能力：「流れを司る程度の能力」

「夢を繋げる程度の能力」

流れを司る程度の能力は、ありとあらゆる流れを自由自在にコントロールできる。また、操るだけでなく生み出すことや消すこともできる半チート的な能力。しかし、（時の流れを遅くする）などは燃費が悪い。

夢を繋げる程度の能力は、誰かの夢の中に介入することができる。しかし、自分では制御できずだいたい突発的に発動するがたまに任意の相手の夢に介入できることがある。

ちなみに、靈力と魔力が備わっており総容量は靈夢より少し劣るくらい。

主人公設定（後書き）

ちょっと、つけたし。容姿とか忘れたので。某黒猫さんの設定を使わせていただきました。

夢と現の境界（前書き）

やつじ一話です。

夢と現の境界

夢。夢を見た。とても不思議な夢だ。

それが夢だと認知できたのには理由がある。俺は空中に漂つたり浮かんでいた。

普通の人間なら、道具も使わずに空中に浮かぶことなどできない。重力に引っ張られて落下する。にもか

sid e~?~?~

かわらず俺は浮いているんだからこれはもう夢で確定だろ？

そして自分で結論づけてふと、周りを見渡した。

眼下には、今はもうほとんど見られないであろう雄大な自然が広がっていた。

木々が生い茂る森、山の上から流れる川、燐々と照りつける太陽と
どこまでも澄んでいる青空。どれをとってもこれまでに美しい
と感じさせる自然が広がっていた。

? 「綺麗だな、こんなに綺麗な場所今まで見たことねえや

現代は人工的に造られたもので溢れかえっている。今、残っている
自然も人の手が加えられたものほうが多いように感じる。
しかし、ここは人の手など加えられた形跡があるで無く自然がある
べき姿で存在している。

それは、現代で生きる少年にとってとても新鮮なもので少年はしば
しこの大自然に見とれていた。

? 「これが夢じゃなかつたらよかつたのにな、あの腐つた世界より
もうこの世界のほうが楽しそうだ」

少年は羨望と諦めが混ざったよつたな顔で苦笑し、そして思ったことを口にした。

それは、少年のわがやかな願い。

? 「もし生まれ変わつたら、今度はひつひつ世界で生きてみたいな」

そう言つた瞬間、意識が遠のくのを感じた。少年は少しだけじやうひ

? 「もう少しだけ見ていたかったな」

そう言つて、意識を手放した。

夢と現の境界（後書き）

夢のなかの話でした。

夢から現実、そして幻想へ（前書き）

いつも、RENです。

今回は、現代編を一気に詰め込みました。それと、あの人が出てきます。それではどうぞ。

夢から現実、そして幻想へ

カーテンの隙間から差し込む光で目が覚めた。

？？？「んー、朝か

俺こと狂咲 彩人は朝が弱い。夜更かししたわけでも、低血圧なわけでもないのに朝が弱いのだ。

彩「5時57分、アラームの3分前に起床か。」

伸びをひとつして着替え、朝食を作るためにキッチンへ向かう。一人暮らしなので当然だが。俺には親が居ない。いるにはいるが俺は親と思っていないし、あっちも自分のことを息子とは思っていないだろう。ただ、生活費などは振り込んでくれるけど。

別に寂しくはない。俺をここまで育ててくれたばあちゃんがいたから。ばあちゃんは厳しかった。「男ができないのは妊娠と出産だけでいい」の信念の元、生活に必要なスキルは全て叩き込まれた。でも、とても暖かかった。俺がまだ小さいゆえに善悪の判断もできず迷惑かけたときも

婆「迷惑をかけていけないのは他人、迷惑をかけてもいいのは家族と信頼できる友達だけなんだよ」

と、言つて笑つて抱きしめてくれた。その言葉を聞いたとき、とてもうれしくて胸の中が暖かくて泣き笑いながら頷いた覚えがある。それと、近所の人たちもとてもよくしてくれたから性格が曲がることはなかつた。むしろ、近所の子供たちとよく遊んでくれるお兄さん的なレッテルを貼られていた。

前に、「ヒマだから遊んで」と近所の子供たちが数人家に来たことがある。理由を尋ねたら、八百屋のおばちゃんが「アヤちゃんのところに行けば遊びに困らないわよ」といつたからだそうだ。それからとくに「おばちゃんパワー」。いつもお世話になつて、少しでも恩返しができたらと思って子供の相手をしている。何より結構自分も楽しんでるしね。

そんなばあちゃんも去年、寿命で亡くなつた。とても、安らかな顔をしていた。葬儀には近所の人たちが大勢手伝いに来てくれた。ばあちゃんはとても人望がある人でよく相談事を、それこそ老若男女問わず受けていたから当然である。泣いたのは、ばあちゃんが死んだその日だけだった。おばちゃんたちは、俺のことをとても心配していた。「泣いたつていいのよ」と言つてくれた人もいた。そんな人たちに俺は、「もう十分泣きました」と言つて笑つた。そんな俺を見て、とても安堵した表情で「困つたことがあつたら力になるからね」と言つてくれた。

そんな人たちに支えられて俺はここまで生きてきた。正直ありがたいと思う。ここの人たちは大好きだ。でも、やっぱりこの世界は腐つている。

彩「うん、今日もいい出来だ」

なんだか昔のことを想い帰していくても料理の手は止まつていなかつたみたいだ。まあ、長らくやつていたから体が覚えてしまつたんだろうな。ばあちゃんは、料理の先生もやつていたから教えられたレシピは和・洋・中からインド・ギリシャ・イタリア・フランス、デザートも和・洋・中と何でもござれな感じだ。特に和食は高級料亭レベルだつたらしい。

今日は学校がある日だからそろそろ行かないといけない。まあ、俺は勉強が嫌いだし？授業中は専ら、読書（小説）か楽譜を見て脳内再生のびらりかだけどね。それでも、成績は悪くない。一夜漬け最強。

彩「時間は8時、弁当は持った、忘れ物は無し。」

外に出て、家の施錠をし自転車に跨つて

「せんじゅ、これますか」

そのとき俺は気づいていなかつた。上空に胡散臭い笑みを貼り付けた金髪の美しい少女が自分を見つめていることに。

俺の通う学校は家から自転車で20分のところにある小・中・高のエスカレータ式で小学生の頃から通つてゐる。なんてつたつて成績さえ問題なれば受験なんて必要ない。勉強嫌いの俺からしてみればとても好条件なのだ。

子「「「あつー、アヤ兄ちやんおはよーーー。」「

彩「おつづーおはよーー。」

小学校から通えるので必然的に近所の子供たちと一緒に登校する」とが日課になつていて。雑談しながら走つてると校舎が見えてきた。子供たちと別れ、自分の教室に向かつ。

ク「おつ、彩人！おはよー！」

彩「チャオッス！」

ク「相変わらず、そのあいさつなのな」

彩「いいだろ、朝も昼も夜も同じ言葉で済むなんて合理的だし」

ク「まあいいけど。それよりさ、いい加減サッカー部に入つてくれよ。お前運動神經いいし、絶対レギュラー取れるつて。おまけに顔もいいし」

彩「またその話か、何度も言つけど俺は部活には入らないよ」

俺は部活には入つていない。めんどいし、なによりそんなことに時間割いていたら商店街がしまつてしまつ。頼めば売つてもらえるだろうがやはりそれは申し訳ない。それにタイムセールは時間との戦いであると同時に近所のおばちゃんたちとの死闘の場である。俺はほぼ毎日、戦場で戦っています。

クラスメイトと他愛無い話をしながら席に着く。俺には、仲のいいやつはいてもばあちゃんの言つ友達に値する奴はまだ居ない。例外を除いては、

？「アヤ、やつときましたね。もう遅いです、遅すぎます」

彩「早苗、H.R開始30分前の登校が遅いとはびうこいつア見で？」

早「私より遅い＝遅すき、の方程式が私の頭の中では確立しているのです。」

彩「ひどい話だな。」

その例外の名前は東風谷ひがいや 早苗さなえ 小学校から今に至るまで同じクラス、席替えをしようものなら決まって周囲8つのうちのどれかになると、いつも怖いくらいに腐れ縁つぱりを發揮している。

一時期腐れ縁つて実は呪いなのではと本気で考えたことがある。それを早苗に話したら「諏訪子さまに聞いてみましょう」と若干暴走気味になつたのは余談である。

早「そんなことより、今日はテストが帰つてくる日です。前回は不覚を取りましたが今回は抜かりはありません。」

「こつは何かにつけて俺に勝負を持ちかけてくる。テストの結果から体育の授業、家庭科の調理実習etc.とにかく勝負事にできそなことは大体持ちかけてくる。ちなみに総合的に見ると俺の圧勝。いくつか負けたものはあるけどそれでも勉学では負けたことが無い。」

彩「はいはい。そういうに無い、いい夢だね。」

早「むへへ、やつかりていい気になつていられるのも今のうちですよ。」

と類を膨らませながら抗議していく。やべつーなこの生物、超かわいいんですけどーー！
と、他愛ない話をしつづけると

先「おい、お前ら席に着け。HR始めるぞ。」

先生が来て出席を取り始めた。

このとや、まだ俺はあんなことになるなんて思つてもいなかつた。

彩「やつと終わった―――。」

今日一日のカリキュラムを終え、家路に着く。

早「また負けた・・・」

と隣で頃垂れているのは、言わざもが早苗である。今日のテストの結果？俺の勝ちに決まつてんだろ、まあ、5点差だつたけど。

早「勝つたら、このフルーツ全部のセミラクルパフェを奢つてもらおうと思つてたのに~」

俺は、早苗との勝負のとを賭けを持ちかける。それは負けたほうは勝つたほうの言つことを常識の範囲内でひとつとつものである。ただし勉学においては俺は5回勝つたら、早苗は常識の範囲の緩和が条件として加わる。めちゃくちゃ早苗龜戻だがこれは俺から提案した。理由？早苗に勉学で負けない絶対の自信とそのほうが燃

えるし面白そうだからだ。何が面白いって？早苗の悔しがる顔とか早苗の悔しがる顔とか早苗の悔しがる顔とか、あと早苗の悔しがる顔とか、かな。

彩「俺に勝といつなんざひへ世紀せんじよ」

早「でももう差だったじゃないですか～」

彩「そのうちがでかいんだよ」

早「まあ、いいです。次で終わらせますから」

彩「負けフラグが立つたな」

そんな話をしながら帰路に着く。

彩「じゃ、俺ひつだから」

早「はい、明日は私より早く来てくださいね」

彩「だが断る……」

お互に軽口を口を合って別れを告げる。

彩「じゃ、またな。早苗」

早「ええ、また。アヤ」

早苗と別れ俺は途中コンビニでおにぎりとお茶を買って家へと帰る。自転車を止め、鍵を開け家の中に入る。

彩「ただいまー、って言つても返事は無いけどね」

一人暮らししながら当たり前だ。でも、もはや習慣になつてしまつたので意識しないでも口が動くのだ。そして、本来なら返つてくるはずのない返事が今日に限つて返つてきたのだ。

?「お帰りなさい。待つていたわ」

彩「！？？」

居間に行くとそこには見事な金髪の美少女、というより美女が座っていた。そいつは、口元を扇子で隠しても胡散臭い雰囲気を纏つていた。美人なのにもつたといない。

彩「俺は、彩人。あんた、いつたい誰だ？」

?「自分から先に名乗るなんて意外ね。普通、後者の言葉が先に出るでしょ？」

彩「あいにく、少し特殊な環境で育つたもんでね。で、あんたは、いつたい誰なんだ？なぜ俺の家にいる？」

紫「私はハ雲 紫 やくも ゆかり よ。さつきも言つたでしょ。あなたを待つっていたのよ」

紫は胡散臭い笑みを深くしながら質問に答えた。

彩「昼間から俺を見ていたのはお前か？」

その問いに、紫は少し驚いた表情をしたがすぐに先ほどの同じ笑みに戻り

紫「あら、気づいていたのね」

彩「まーな、とにかく付いたのは随分だけどな。で、俺に何のよつだ？」

俺は少しおどけた風に肩をすくめ、本題の話を促した。

紫「ええ、そのことなのだけれどね」

紫は、そこで言葉を区切り、「さあを見据え言つた。

紫「あなたにはこれから幻想郷で暮らしてもいいわ」

彩「は？」

紫はそつと手を横に払つた。

彩「なつ……」

紫「あちりに着いたら博麗神社を尋ねなさい。そこ待ってるわ。」

その言葉を聞きながら体は不気味な空間に落ちてゆく。そして、意識もそれと同時に途絶えた。

夢から現実、そして幻想へ（後書き）

はい、その人とは早苗ちゃんでした。次回は彼の能力が発動しちゃいます。つつても今回みたく長くするつもりはありません。感想・誤字指摘がありましたらお願いします。ではまた。

一人ぼっちだった少女 ~dream sides~ (前書き)

今回は彼の能力が発動しています。

それでは、ビギー

一人ぼっちだった少女 side~彩人~

side~彩人~

気がつくと、そこは真っ白な空間だった。今朝の夢と同じような感じだ。ということは、これは夢か？でも、今朝の夢のように雄大な自然やどこまでも続く青い空どこにも無く、先の見えない白い空間のなかにぼつんと俺が存在していた。

彩「これは、夢なのか？だとしたら、ちと殺風景過ぎやしないか？」

そんなことを考えていると、不意に声をかけられた。

？「お兄さん、誰？」

驚いて声がしたほうを振り返るとそこには少女がいた。可愛らしい赤い服に綺麗な金髪、頭にはナイトキャップのような帽子をかぶつていてとても可愛らしい娘だ。だが、それよりも目を引くものがあった。少女の背中から七色の結晶が付いた羽？が生えていたのである。

俺は、しばし呆然としていたが

？「ねえーお兄さんは誰なの？」

少女の声ではつとして取り繕つように自己紹介をした。

彩「ああ、『めんね。俺は彩人。狂咲 彩人だ。君の名前は？』

フ「私はフランドール・スカーレット。フランでいいよ。」

お互に自己紹介を済ませ、俺は気になつていてることを本人に聞いた。

彩「なあフラン。その背中についている羽？は本物か？」

フ「そうだよ～。だつて私は吸血鬼だもん。」

吸血鬼。おそらく世界でもトップクラスの知名度を誇る西洋の妖怪。その吸血鬼が目の前にいるのだ。正直信じられない。だが、この少女は嘘をついていない。日頃から子供の相手をしているせいか、嘘を見分けることができるようになつていたのだ。

フ「ねえねえ、彩人は人間なの？」

彩「ああ、俺は人間だよ。とても脆くて儂い一人の人間さ。」

わざと芝居がかつた動きでフランの質問に答える。
少女はクスクス笑いながら

フ「彩人つておもしろいね～」

と言つて二人で笑いあつた。それから、いろんな話をした。主に互いの種族のことを質問したりそれに対して解答したり。それで知つたのだが十字架は吸血鬼の弱点ではないらしい。ちなみにフランは幻想郷にいるらしい。しばらくこのやり取りが続いた。
不意にフランの顔に翳りと少しの狂氣の色が浮かんだ。

彩「どうした、具合悪いのか？」

俺は心配になりフランにそう尋ねた。

フ「ううん、違うの。この夢が覚めたら、また一人ぼっちになっちゃうなって思つて。私は力が強すぎるから長い間地下に閉じ込められてるの。」

彩「長い間つてどのくらい？」

フ「495年間」

俺はその話を聞いて絶句した。そりやそりや。いくら力が強いからって495年間も一人で地下に閉じ込められるなんてそんなのは横暴だ。気づいたら俺はフランを強く強く抱きしめていた。フランは驚いたようだが抵抗はしなかった。

彩「フラン、お前は自分が一人ぼっちって言つたがそれは間違いだ。

」

フ「え！？」

彩「俺がいる。俺がフランを一人になんてさせない。」

それは、初めての感情だった。俺はただ、この少女を助けてやりたいと思つた。まだ、会つてから数時間しか経つていないけどそう思えるくらい、この少女のことが気に入つたんだろう。

フ「だ、だめだよー私の能力は【ありとあらゆるもの】を破壊する程

度の能力】。私の近くにいたら彩人を傷つけちゃう。私、彩人を殺したくないよ。」

フランの声はだんだんと小さくなつて次第に嗚咽が聞こえてきた。俺はフランの頭を優しく撫で親が子供をあやすような聲音で

彩「心配してくれてありがとな。でも大丈夫、俺は死なないよ。」
と、とても穏やかな、しかし絶対の自信に満ちた笑顔でフランを見た。

フランは驚いたように目を見開き、それから顔を歪ませて、すがるようにして声を上げて泣いた。

今までガマンしていたものが、あらゆる負の感情がフランの頬を零となつて伝つていく。

彩「一人が寂しいんじゃない。自分は一人ぼっちなんだって思うことが寂しいんだよ。それと、その悲しみは決して忘れちゃいけない。それはフランだけの強さになるはずだから。」

俺は腕の力を緩め、今度は包み込むようにじつかりとフランを抱きしめ頭を撫で続けた。

フランの涙はとても綺麗な色をしていた

俺とフランの体が透けていく。田覚めが近いのだろう。フランは不

安そうにこちらを見ていた。そんなフランに俺は一言だけ言った。それは、別れを悲しむ言葉ではなく再会を約束する誓いの言葉。

彩「またなフラン、――――――！」

フ「うん――！」

そう返事をしてフランドール・スカーレットは花のようにな笑つた。その笑顔に狂氣の色は微塵もなかつた。

side～フランドール～

見慣れた天井、見慣れた壁、見慣れた床、いつもと変わらない私の世界。けれど心の中はいつもと違つていた。

とても暖かな気持ちで満たされていた。ふわふわした感じがとても心地いい。

フ「えへへ！」

夢での出来事を思い返すたびに頬が緩む。495年間、他人の温もりに飢えていた少女にとつてまさに至福の時間だつたのだ。

しかし、そんな時間が夢だと分かつた時普通なら絶望する。大きい幸せなら反動も大きいはずだ。

少女、フランドールは夢から覚めても絶望せず、むしろその目には強い光が宿っていた。

フ「絶対に迎えに行くからいい子で待つてろよ、か」

それは、夢から覚める直前に彼が言った言葉。彼が来てくれる保証はない。それでもフランは信じてみようと思った。自分を救ってくれた、あの暖かくて優しい彼の言葉を。それに、フランは直感的に感じていた。

フ「また、夢の中で彩人に会える気がする。」

だから、自分も頑張ってみようと思った。この力を扱えるよう、この力と向き合つために。

フ「私頑張るから、いい子にしてるから、だから」

フ「だから、早く迎えにきてね彩人！」

少女は、どこにいるかも分からない彼に向けて言った。

一人ぼっちだった少女 ~dream sides~ (後書き)

なんだかすゞくあつさりしているような気がします。
もつちよつと何とかできたかも知れませんが作者の文章力ではこれが限界です。
感想、誤字指摘ありましたらお願いします。

side 彩人

俺は現在、博麗神社なる場所に向けて歩いている。

何故、見知らぬ土地で目的地の場所が分かるかといふと少し前まで遡る。

夢から覚めた俺は、いきなり思考が停止した。

だって、十数匹の猫が自分に丸めた体を密着させ寝ているのだ。そのうちの一匹は腹の上で寝ている。

通りで暖かいわけだ。

起こすのも忍びないがこのままというわけにもいかないので体を起こす。

すると寝ていた猫たちも各自伸びをして周りでニャーニャー鳴いていた。

彩「さて、紫は博麗神社で待つてるって言つてたか？ つーか、初めての土地で地図もなしに特定の場所に行くってこれなんて無理ゲー？」

せめて方角だけでも分かれば何とかなりそうなものだが。
俺は文字どおり猫の手も借りたい心境で聞いてみた。

彩「なあ、博麗神社つてどの方角にあるか知らないか？」

自分でなにせつてんだううなと思いつつビーッするか考えようとしたとき、お腹に乗っていた猫がある方角を向いてニャーニャー鳴いた。よく見ると、その黒猫は尻尾が2本あり緑の帽子を被つて耳には金

の輪を付けていた。

彩「！」の方角にあるのか？」「

そつ聞くとまるで返事をするかの！」とベーヤーと鳴いた。
普通なら偶然で片付けるが今までの出来事からこの猫に乗せられる
のも一興と思い、

彩「そつか、ありがと。助かつたよ。」

と、黒猫の頭を撫でてやつその方角へ歩を出した。

s.i.d.e～？？？～

？「不思議な人間だつたな～」

彼が見えなくなつた後、私は猫の姿から人の姿に戻つた。

今日もいつものようにマヨヒガ周辺の猫たちを集めて言つことを聞くように訓練しようつと思つていた。

が、猫たちは見つからずしばらく探していると毛玉を見つけた。

それは、探していた猫たちが一人の少年に寄り添つて寝ていたのである

ここいら周辺の猫たちは警戒心が強く、猫の妖獸であるわたしも警戒を解くのには苦労した。

それなのに、この少年の周囲には多くの猫たちが寝ている。

有り得ない。

ただの人間に最初からここまで近づき、まじめとても気持ひよた
そうに寝ているなんて。

だが不思議だ。寝ているからなのかどうかの少年には警戒心
が沸いてこない。

他の子たちを見ていると自分も眠くなつてきた。

? 「ちよつとだけ寝ちゃおうかな」

そう思つた時にはすでに彼の隣まで来ていて、彼を起さないよう
に猫の姿で彼のお腹に乗つた。

何故そうしたか自分でも分からぬ。ただ、

? 「いいにあい／／／

とても安心できた。そのまま、彼の心臓の音を聞きながら眠りに落
ちた。

起きた彼は、博麗神社に行きたがつてゐるよつた。

だから、私は神社のある方角を教えた。

そしたら、彼はお礼を言つて頭を撫でてくれた。

私の主とその主の主、一人とは違う大きくて暖かい手が私の頭を包
んでいた。

しばらく撫でてくれたその手は不意に離れていき名残惜しくもあつ
たが彼は皆にお礼を言つて歩き出した。

? 「気持ちよかつた／／／

頭を撫でられていた余韻を感じつつ、思つたことを口にじていた。

? 「また・・・会えるかな。」

今度は「」の姿で。

side 彩人

もつかれこれ数時間は歩き続けている。あたりは暗くなり始めていた。

今は初夏だから寒さで死ぬ」とはないだらうが、でもれば口が沈む前に神社に着きたかった。

田はといへて沈み、空には綺麗な満月が浮かんでいた。

彩「しゃーない、今田は「」で野宿か。」

「」にきたとき、「」、何故か持っていた自分のバック。

中身は三田分くらいの栄養食とお菓子、水が入っていた。どれも家にあつたものだ。紫が置いといてくれたのか? しかしどうせなら、神社に落としてほしかった。

と、どうしようもないことを思いながら空を見上げた。

彩「綺麗な満月だな

? 「そうなのか~」

彩「そうなのか~、じゃなくて空を見れば分かるだろ。」

? 「ほんとだ~」

彩「それで、君は誰だい?俺は彩人って呼ばれてる」

ル「私はルーミアって呼ばれてるよ~」

唐突に始まった自己紹介、俺の言葉を真似るように話す少女だが、俺は直感で感じていた。

こいつは人間じゃない。

フランや道を教えてくれた黒猫と似た雰囲気を感じる。何より、彼女の周りには闇と形容するのがふさわしい黒いもやみたいなものを纏っていた。

俺と少女はほぼ同時に喋っていた。

彩「君は」

ル「あなたは」

彩「俺を食べる妖怪?」

ル「食べられる人類?」

そして、無言のままお互いに見つめ合つ。

どのくらいの時間こうしていただろう。

1分? 10分? それよりも長く? 経過した時間は分からぬが沈黙は唐突に消えた。

彩「つづく、くすぐす、あはははーー!」

ル「？？？」

ルーミアは突然笑い出した俺に訳がわからずきょとんとした顔を向けていた。

彩「いや、『めん』『めん』。ほぼ同じタイミングでまったく逆の事言うからや〜」

そう言って、またからからと笑った。

どうやら笑いのツボに入った用である。

しばらく呆然と眺めていたルーミアだったが釣られたのか

ル「つふふ、くすくす、あははは」

ルーミアまで笑い出した。

そうしてお互いに落ち着くまで笑った後、俺はルーミアにひとつ提案をした。

彩「なあ、ルーミア？お腹が空いているなら俺を食べるよりも、もつといいものがあるぞ」

ル「それっておいしいの？」

彩「それは食べてからのお楽しみって事で。もし、満足できなかつたら俺を食べてもいいよ。期待以上なら俺を食べないって約束してくれるか？」

ル「う〜ん」

ルーミアは少し考え、やがて

ル「分かつた。それがおいしかつたら彩人を食べない。約束する。」

目を爛々と輝かせ、大きく頷いた。
嘘はついていない。

確認するとバックから板チョコを取り出し欠片をルーミアに渡した。

ル「これが、そのいいもの?」

彩「そ、まあ食べて」」」らん。きっと氣に入るから。」

ルーミアはゆっくりと口に入れ、咀嚼し飲み込んだ。

ル「おいしい……す」」」おいしい……ね、もつと頂戴……！」

どうやら氣に入ってくれたみたいだ。

これで食べられることはないと思つが、今にも食べられそうな勢いで身を乗り出していくルーミアに全体の半分をあげた。
とても幸せそうな顔をしてチョコを食べる姿は年相応の女の子にしか見えない。

俺はその姿を見ながらルーミアに質問していた。

彩「なあ、ルーミア、博麗神社ってどこにあるか知ってるか?」

食べ終わつたらしいルーミアは、満足げな顔をしながら

ル「あの、紅白のいる場所?知ってるよ」

紅白とはおやじく巫女の事だつ。衣装が紅白だし。

彩「その場所を教えてくれないか?そこに用があるからさ」

ルーミアは少し考える素振りを見せ、上田遣いでこいつ言つてきた。

ル「私も一緒に行つていい?そしたら教えてあげる。」

ツツツ……」これは反則だろ。

美少女に上田遣いでお願いされて断る奴は男じゃねえ。

彩「いいのか?ルーミアが迷惑じゃなければ願つてもないけど」

心の動搖を抑えつつ何とか平静を保てたようだ。

ル「決まりね……それじゃ明日に備えてもう寝よ。」

そう言つやこなや俺の隣に腰掛け、もたれかかるように体重を預けてきた。

なんというかずいぶん無防備なんだな。

襲われるとか考えないのかね。

襲うつもりもないけど。

俺は断じて口リコンじゃない!…口リコンじゃない!…

大事な事なので2回言いました。

ルーミアはすでに寝息を立てており、その寝顔はとてもかわいらしいものだった。

彩「明日こは、着けるといけど

そつ一人ごちながら意識を手放した。

闇を纏つ少女（後書き）

ルーミアって可愛いですよね。見ているととても和みます。

氷精と弾幕117（前書き）

すみません。仕事で出張だったものですから投稿できませんでした。
たびたび、間が長い時もありますがご勘弁を。
それでは、じぞー。

side 彩人

ちゅん、ちゅん。チチチ。

小鳥のさえずりで目が覚めた。

朝が来たのだ。初夏といつても朝早くは、まだ野宿するには気温がいささか低い。

下手をすれば、体調を崩していただかもしれない。

しかし、それは無い。

むしろ、とてもさわやかな気分だ。

その理由は、いまだに俺の胸に頭を預けて気持ちよさそうに寝ている少女のおかげだ。

彼女と寄り添つて寝ていたのでそれなりに暖かかった。

が、そのために体がガチガチに固まってしまった。

ほぐしたいところだが、この可愛らしげな寝顔をもう少し見ていたかった。

少女の顔に手をそえそっと撫でる。

彩「ありがとな」

ルーミアを起こさないように小声でお礼を言った。

くすぐったかったのか身をよじり顔を胸にグリグリと押し付けてきた。

俺は苦笑しながら、もうじょぼぼらへばこのまま居ようと思こルーミアの頭を優しく撫でた。

それから、30分ほど経つてからルーミアが起きたので朝食を摂つた。

朝食後、顔を洗いたいのでルーミアに聞いてみた。

彩「この近くに水辺つてないかな?」

ル「あっちの方に湖があるけど、神社は?」

彩「人に会うのにみすぼらしい格好じや印象が悪くなるだろ。だから、案内してくれ。」

ル「わかつた。あっちだよ。」

湖があるであろう方向を指差しルーミアが言った。

が、動こうとしない。

どうしたのか?と、聞こいつとしたら自分の後ろに回つて肩に飛び乗つてきた。

いわゆる肩車である。

ル「おー、たか~い」

彩「ルーミア、何故そこに乗る?」

ル「なんとなく?」

彩「俺に聞くなよ・・・」

まあいいか、そんなことより顔を洗うために湖に向かつた。
道中、ルーミアがとても上機嫌だったのは余談である。

湖に着いたので早速顔を洗い、うがいをしてからの中がさっぱりした。

が、少し違和感を感じた。

彩「つめてーな」

いぐら早朝とはいえ湖の水は驚くほど冷たかった。

ルーミアに理由を聞いてみると

ル「あ〜、それはここにチルノがいるからだよ」

彩「チルノ？」

ル「そ、氷の妖精で私の友達」

ルーミアがそう答えた瞬間、氷が降ってきた。
雹とかみぞれとかそんなレベルじゃない。

氷柱を人の腕くらいの大きさにしたサイズのものが降ってきたのだ。
俺はすぐにルーミアを抱えて走り出した。

自分たちがいたところは見事にちっちゃな氷山と化していた。

？「最強のアタイの攻撃をよけるなんて、あんたなかなかやるわね
！」

その声は空から聞こえた。

見上げると、青い服に青い髪、頭には青いリボンを付けた少女がいた。

それだけなら、普通の可愛らしい少女だわ。
浮いている時点で普通ではないがこの際気にしない。
ルーミアだって所見では浮いていたし。

彩「氷の羽・・・」

少女の背には氷の羽が生えていた。
この少女がルーミアがさつき言っていたチルノなんだな？

ル「チルノ～、おはよ～」

チ「あ、ルーミアじゃないーおはよー」

二人があいさつを交わす。
やはり目の前の少女がチルノであつていいのひだ。
それよりも気になつていてることを聞いた。

彩「どうしていきなり攻撃してきたんだ？」

チ「そんなの決まつているじゃない、あんたがアタイの縄張りで勝手なことをしていただからよ」

と、胸を張つて言い切つた。

ルーミアに視線を送ると首を横に振つた。
どうやらチルノが勝手にそう言つてているようだ。
なんて傍迷惑な。

チ「そんなことより、アタイと勝負よーー！」

彩「なんで？」

チ「それは、アタイが最強だと証明するためよ」

俺はこの一言で悟った。

ああ、こいつは馬鹿なんだな。

チ「それじゃ、こくわよ。」

彩「やべーな・・・」

はつきり言ってあのサイズの氷柱を食らって無事でこられる自身がない。

ルーニアに助けを求めようと/or、ルーニアの方を見ると

ル「彩入〜、がんばって〜」

完全に傍観者を決め込むつもりだ。

俺はため息を吐いて、

彩「しゃーない、やるだけやってみますか」

覚悟を決めた瞬間、先ほどと同サイズの氷柱が弾幕となつて襲い掛かってきた。

彩「わつ、ほつ、おわつーー！」

何とかあたらなによろこかわしていく。

チ「なかなかやるわね、ならこれでどうだー！」

チルノはカードのようなものを出して上に掲げて叫んだ。

チ「氷符』アイシクルフォール』

叫んだ瞬間、今までとは異質の弾幕が襲ってきた。

両側から挟み込むように迫つてくる弾幕に気を取られ前方から来る弾幕への対処が遅れた。

彩「やべつーー！」

ル「彩人！危ないーー！」

ルーミアが叫んでいるのが聞こえたが、それどころじゃない。回避を諦め、来るべき衝撃に供え身を固くした。が、いつまで経っても衝撃が来ない。

目を開けてみると、弾幕のスピードが極端に遅くなっていた。弾幕だけじゃなく全ての動きが、まるでスローモーションの世界に入ったかのように遅くなっているのだ。

彩「これは、いつたい・・・？」

考へても仕方ないので、とりあえず弾幕の軌道上から逸れた瞬間普通のスピードに戻った。

ルーミアの方を見ると安堵の表情を浮かべていた。

チ「今のをかわすなんて、あんた人間にしてはなかなかやるわね

彩「そりや、どーも」

なんとか、危機は去つたが問題は他にある。
こちらは攻撃手段が無いのだ。

ゆえに、チルノを止める術が無い。

チ「じゃ、次行くよ。凍符『パーフェクトフリーズ』」

虹色の弾幕が無造作にばら撒かれた。

偶然、自分のほうには来なかつたので動かないでいると玉の動きが止まり色が白になつていいくつかこちらに向かつてきだ。

彩「マジかよ！・・・ん？」

突然のことに驚いたが、さきまでと違うことがあるのに気が付いた。

彩「弾幕一つ一つの動きが分かる！？」

どうしてこうなつたか分からないうが、ひとつ面白そつなことを思いついた。

飛び交う虹色と白色の弾幕、遠田から見ればとても綺麗だろ。

そう思つた瞬間、ひとつビジョンが浮かんだ。

それは、白と虹の玉の中で舞う自分の姿。

俺の体は自然に動いていた。

side→チルノ

アタイは勝利を確信していた。

人間が、おそらく初めてであろう弾幕ごっこで勝てる確率はほぼ〇。ましてや空も飛べず、弾幕も打てないただの人間だ。

負ける要素はひとつも無い。

むしろ、よく粘つたほうだ。

本当はスペルの一枚目で決まつたはずだつた。

だが、人間はかわしていた。

どうやつたかは分からなが運がよかつたのだらつ。

だから、2枚目で終わるはずだつた。

それが・・・、

彩「なんで？なんであたんないのよ――――！」

人間は踊つていた。

それも弾幕の一番集中している部分で。

その顔は笑つていた。

新しいおもちゃを与えられた子供のように、目を爛々と輝かせ襲いかかる弾幕を全て紙一重でかわして。

そして彼は踊り（かわし）きつた。

スペルはあと一枚。

チ「なら、これで決めてやる。雪符『ダイアモンドブリーズ』

そのスペルが宣言されることとなかつた。

side～彩人～

弾幕が止んだ。

攻撃が止まるのと同時に俺の舞も終了した。

なかなかつまらこつたと思つ。

とはいっても、迫る弾幕をかわす際に踊るように動くだけである。何かをイメージしているとかそんなのは微塵も無い。ルーミアの方から歓声と拍手が聞こえてくる。それに軽く応え、ナルノに意識を集中した。

どうやら最後の攻撃を行うようだ。

だが、ナルノの声は第3者の声によつてかき消された。

チルノの後ろから緑髪の少女が腕を交差させてチルノに突っ込んでいた。

チ「ガツ！！」

いわゆるクロスチョップを食らつたチルノはそのまま湖に落ちていった。

? 「もう！ 湖は皆のものだつていつも言つているでしょ……チルノちゃんが湖を独り占めしたら皆が困るんだよ！……！」

彩「あの～～」

? 「ああっ！ チルノちゃんがご迷惑をおかけしました。私からよく
言い聞かせて置くので許してあげてください。」

と、声を掛けたらいきなり謝られた。

とりあえず落ち着かせるために子供をあやす常套手段を使つた。

彩「気にしてないから、とりあえず落ち着いて、ね?」

なでなで

と
緑髪の少女の頭を撫でた。

? 「ふえつ? あつ・・・はづく~ // / 「

彩「落ち着いた？」

? 「は、はいっ // / / /

「ふふ、どうも、おおきな落葉が着いたよ。」

彩「俺は狂咲
彩人。好きに呼んでくれ」

大「私は大妖精です。皆からは大ちゃんって呼ばれています」

彩「よろしく。時に大ちゃん」

大「なんですか？」

彩「チルノが湖に浮かんでいるんだが？」

大「えつ？ もや――――――、 チルノちや――――ん――」

と、叫んでチルノのところに飛んでいった。

いじりがいがありそうだな、と思いながら腰を下ろしてチルノ救出劇を見ていた。

すると、ルーミアが隣に座つてこちらを見てきた。

どこかものほしそうな、何かを期待しているそんな目だ。

俺はすぐに思い当たつてルーミアの頭に手を伸ばした。

なでなでなで

ルーミアは少し驚いたようだが、頬を朱に染め気持ちよさそうに目を細めた。

大ちゃんがチルノを抱えて戻つてくるまでルーミアを撫で続けた。

いつになつたら神社に着くのか・・・

氷精と弾幕11111（後書き）

チルノの弾幕で一番避けにくいのはアイシクルフォールだと想うのは
は私だけでしょうか？

樂園の巫女と普通の魔法使い（前書き）

連投かと思つたら口付が変わっていた・・・だと?

side 彩人

大ちゃんがチルノを抱えて戻つてくるのを確認した俺は立ち上がり服に付いた汚れをはたき落とす。

ルーミアも立ち上がり同じ動きをする。

さて、一悶着あつたがそろそろ神社に向かうとしよう。

彩「さて、いいかげんそろそろ神社に向かうか」

ル「そうだね」、紅白もいい加減起きてると思つたへ

そう言つとチルノの介抱をしていた大ちゃんが「ひかりの言葉に反応した。

大「あつ、もう行かれるんですね。本当にチルノちゃんがご迷惑をおかけしました」

と、深く頭を下げてきた。

彩「わつきも言つたけど気にしてないつて。それよりチルノが起きたら伝えてほしいことがあるんだけど」

そう言つて大ちゃんに伝言を預けた。

大「分かりました。チルノちゃんが起きたら伝えておきますね」

彩「ありがとう。それじゃ、またな

ル「またね~」

大「はい、また何時でも来てください」

それを聞いた俺とルーニアは別れを告げ、神社に向けて歩き出した。
大ちゃんは見えなくなるまで大きく手を振っていた。

side／チル／＼

チ「あれ？・・・」「は？」

何時寝たんだつけ？と思いながらアタイは体を起こした。

大「あつ、チルノちゃん起きたんだね」

チ「大ちゃん・・・？」

隣を見ると大妖精ことアタイの友達の大ちゃんが居た。
頭が覚醒するにしたがつて先ほどの記憶が思い出される。
確か、人間と弾幕ごつこしていくそれで最後のスペルを唱えようと
した直後に背中に衝撃が走ったのだ。
そこまで思い出し、アタイは俯いた。

チ「そつか・・・アタイ、負けたんだ・・・」

負ける要素などひとつも無かつた。

が、アタイは負けた。

目の辺りが熱くなり、溜め込んだものが押し出ようとしている。

大「違うよ、チルノちゃんは負けてないよ！」

チ「えつ？」

アタイは大ちゃんの言葉が信じられなかつた。

実際にあの人间はここに居なくて、アタイは倒れていた。

普通は負けたと思うだろう。

大「実は彩人さんから伝言を預かつているの」

彩人とはあの人間の名前だろう。

そういうえば、名前を聞いてなかつたなと思いながら

チ「なんて、言つてたの？」

アタイはあの人間がなんて言つてたか気になり大ちゃんに詰め寄つた。

大「『すつげえ楽しかつた。また今度遊ぼうな、そのときは決着つけようぜ。それまで今より強くなつていい子にしてろよ』って」

アタイはそれを聞いた瞬间、胸の辺りが熱くなつた。
周りは妖精つてだけで自分のことを馬鹿にする。
それが悔しくて、情けなくて強くなろうとした。
でも、ぜんぜん届かない。
負けるたびに馬鹿にされる。

今回もそうだと思った。

だけど違った。

アタイと戦って、樂しいつていう奴は今まで居なかつた。

逆にあつちのほうから、またやろうつて言われたのは初めてだつた。

チ「ふふふつ」

アタイは笑つた。

可笑しくて、うれしくて今までこんな気持ちになつたことなど無かつた。

チ「面白い人間だつたね」

大「とてもいい人だつたよね」

アタイは強くなるつて決めた。

見返すためではなく、次に会つたときもあの^{人間}と樂しく遊ぶため^に。

チルノの目には力強い光が灯つていた。

s i d e ↗ 彩人 ↘

俺目の前にはひとつ^の試練が立ちはだかつていた。

彩「ここをのぼるのか・・・?」

途中、鳥居が見えたからここに神社があるのは間違いない。
が、神社に続くであろう階段が問題なのだ。

そこまで高い山ではないが、階段はキツイ。

ル「早く行けよ~」

ルーミアが急かしてくる。

ここで考へても仕方がないのでとりあえず登る」といふ。

少年登山中・・・

30分後、ようやく鳥居までたどり着いた。

今さらだがルーミアを降りせばもう少し楽だったな、と思つても後の祭りである。

彩「ここが、博麗神社か・・・」

なんというか、自分の世界の神社と対して変わらない。とつあえず賽銭でも入れるために、賽銭箱まで行つた。通貨が同じだとは思わないがこついうのは気持ちが大事だ。ルーミアにも硬貨を渡し一緒に投げ入れる。

シャランシャランと鈴を鳴らし、一礼一拍一礼と願いを言つた。

彩「これからも面白可笑しく暮らしますよつこ」

ル「おいしいものがたくさん食べれますよつこ。それと、・・・

ルーミアの最後のほうはよく聞こえなかつたが、頬が少し赤いよつな気がした

一通り参拝を終え、巫女さんが居るとの話なので探そつと・・・

?「『参拝ありがとうございます。その願い叶つとこにわね

ズシャアツツとまるで狙つたかのようなタイミングで、紅白の巫女服？を着た少女が境内の裏の方から飛び出してきた。
疑問系なのは、腋が露出しているからだ。

？「博麗神社に賽銭が入っているところなんて始めて見たぜ。お前もなかなか稀有な奴だな」

巫女さんの後から、どうからどう見ても魔法使いな格好をした金髪の少女が歩いてきた。

彩「俺は、狂咲 彩人。好きに呼んでくれ。こいつはルーミアだ」

と、とりあえず自ら紹介しておぐ。

靈「彩人ね、私はこの博麗神社の巫女をやつている博麗靈夢よ」

魔「私は霧雨魔理沙、普通の魔法使いだぜ」

お互いに、自己紹介を終えると魔理沙が聞いてきた。

魔「そいつ妖怪だろ？なんで妖怪が人間と一緒に居るんだ」

靈「理由しだいじや退治するわよ」

靈夢はルーミアに向けて殺氣を飛ばす。

俺はルーミアの前に立ち、

彩「こいつは俺をここまで連れてきてくれたんだ。だからそんな怖い顔しないでくれ」

俺はそう頼んだが、

靈「分からぬわよ？油断させて後ろからガブツって食べるつもりかもしれない」

靈夢が手を口に見立てて、ジェスチャーをする。

その言葉にルーミアは何か言い返そうとしたが、その言葉を遮り

彩「それでも俺はルーミアはそんなことしないって信じてる

魔「その根拠は、何なんだぜ？」

今度は魔理沙が聞いてきた。

その瞳は何かを期待しているようだった。

俺は悪戯を思いついた子供のような表情で自信を持って言い切った。

彩「勘だつ！？」

その瞬間、音が離脱した。

靈夢や魔理沙、ルーミアまでもがぽかんと口を開けて固まっていた。

そんな中、俺は言い切った爽快感と達成感に浸っていた。

先に沈黙を破ったのは魔理沙である。

魔「あつはははは！お面白い奴だな。靈夢、お前の専売特許無

くなつちまつたな」

そつ言つてまたからかと腹を抱えて笑つた。

靈「うつさこわね、確かに面白い奴だとは思つナビ。こんなとこ

ろで立ち話もなんだし上がりなさいよ、ルーミアも」

呆れたような口調、だがその顔は楽しげに笑っていた。

「どうやら、魔理沙の期待に応えられたようだ。

そのことに安堵していると、背中に衝撃が走った。

見ると、田に少し涙を浮かべたルーミアが首に手を回し後ろから抱き付いてきていた。

ル「彩人、ありがとー。」

彩「どういたしまして」

俺はルーミアの涙をそつと拭つてやつた。

縁側に腰掛け出されたお茶を一口飲み一息つく。
む、うまいな。香りもいいし、人の方が上手いな。
などと、感心していると

靈「それで、何だつてこんなとこにまでやつてきたのよ」

俺が一息ついたところを見計らつて靈夢が聞いてきた。

魔「そうだぜ、わざわざ賽銭を入れるためだけに来たわけじゃないんだろ?」

魔理沙も興味があるらしく、こちらを見てきた。

彩「あー、それは俺をここに連れてきた張本人に聞いたほうがいいだろうな」

そういうと、二人はルーミアのほうを見た。

ルーミアは茶菓子を頬張っている。

彩「ああ、ルーミアじゃないよ。紫、居るんだろ?」

そういうと、奇妙な音を立てて空間に亀裂が走った。

亀裂は音を立てず広がっていき、中から俺をここに連れてきた張本人、八雲紫が上半身だけの姿で出てきた。

紫「はーい、意外と早かったわね」

相変わらず胡散臭い雰囲気と笑顔を貼り付けてそう言った。

彩「ま、運がよかつたんだろ」

俺はそれにおどけたように返した。

魔「彩入つて、外から来たのか?」

魔理沙が珍しいものでも見るかのように聞いてきた。

彩「気づかなかつたのか?」

魔「ここら辺じや見かけない奴だな、とは思つていたが外から来た奴なんて初めて見たぜ」

こちらをじろじろと見てくる。むず痒いな。

靈夢は外から来たことにあまり興味が無いのか、あからさまに嫌そ
うな顔をして紫を見る。

紫「あら靈夢、流石ね」

「どうやら予感が的中したようだ、靈夢さんもめんどくさうな顔を
してくる。」

彩「それは、俺がこの世界で暮らすことにに関するとか？」

多分これが理由だろ？

つか、落とされる前にせつ言われだし

紫「あなたも理解が早くて助かるわ」

紫はうれしそうに笑う、胡散臭さは消えないが。

紫「あなたには能力が備わっている。それは現代ではとても危険な
もの。ここはそういうものを全て受け入れる楽園」

樂園ね、少なくともあらの世界よりは断然こりのほうがいい。

彩「俺は、あらの世界には戻れないのか？」

別にあらの世界に未練は無い。無いが後腐れの無いように後始末
だけはしたかった。

不意に服の袖が引かれた。

見ると、ルーミアがまるで迷子にでもなったかのよつたな表情を浮かべていた。

その瞳は不安の色に揺れている。

ル「帰つちやうの？」

声と手が震えていた。

俺は少し反省しながら、ルーミアを優しく抱き寄せ、頭を撫でてやつた。

彩「大丈夫だよ。ただ少しだけあつちの世界で後始末するだけだから」

「どうやら不安は取り除けたようだ。

ルーミアは抱きついて頭をグリグリと押し付けてきた。

ルーミアの頭を撫でながら、話を進めた。

彩「それで、どうなんだ？」

紫「少しの間なら大丈夫よ」

なら、俺の答えは決まつてこる。

彩「俺は、この世界で生きてこく」

その答えに紫は満足そうに笑い、

紫「そつ。なら、あなたにはこいで、1年間ほど修行してもいいわ

彩「こいでつて靈夢のところですか？」

紫「そつよ、『JING』弾幕の打ち方と空の飛び方、能力の使い方を学んでもらうわ」

その言葉に靈夢は、

靈「それは別に構わないけど、報酬はあるんでしようね」

ジト田でこじみつけの靈夢に紫は、

紫「向こう一年間のお酒と食材の提供でビックり」

靈「乗ったわ……」

その変わり身の早さに関心していると魔理沙が聞いてきた。

魔「彩人の能力って何なんだぜ？」

彩「ああ? わかんね」

その言葉に紫は、

紫「田を開じて自分の中に意識を集中してみなさい」

言われたとおりこなしてみると、すぐ見つけることができた。

彩「【流れを司る程度の能力】と【夢を繋げる程度の能力】か

魔「どんな能力なんだ?」

彩「おそらく流れに関係するものは例外なく操れるとかそんなんだ
る。夢を繋げる程度の能力についてはよくわからん」

魔理沙はなんだよそれー、と文句を言つてていたが分からんものは分
からん。

彩「ああ、それとなんか力みたいなのが一種類ほどあつたな

紫「それは靈力と魔力ね」

紫によると靈力は身体能力の向上や物へ付加能力を付けることがで
きるらしい。

魔力は自然に干渉しないで現象を起こしたりするのに向いているが
基本的にはどちらも同じように扱えるらしい。

ちなみに靈力と魔力が半分ずつ、総容量としては靈夢に少し劣るく
らいだそうだ。パネエ・・・。

今後の方針も決まつたし、そろそろ後片付けに行きますか。

彩「紫、1週間ほどあっちの世界に連れてつてくれ

紫「わかつたわ、それじゃ行きましょう

靈夢と魔理沙、ルーミアにしばしの別れを告げ少年は世界から消え
るために元居た世界に帰つていった。

樂園の巫女と普通の魔法使い（後書き）

ああ、とても熙い・・・

別れ、そして旅立ち（前書き）

連投です。

もしかしたら、もつ一話投稿するかも？

別れ、そして旅立ち

side 彩人

紫「それじゃ、1週間後に迎えに来るわ」

そう言って隙間に戻つていった。
周りを見わたす。

見慣れた自分の家、外を見ればさまざまの人たちがせしわなく動いていた。

彩「帰つてきたのか」

この発展を遂げたゆえにすばらしく腐つた世界に。

彩「さて、やることは山積みだ」

まずは、高校で退学の手続きをする。

クラスメイトには、決心が鈍るから、と8田田まで話をなすことにしてもらつた。

ご近所には引越しをする事と遠くに行くから多分戻つてこない事を伝える。

子供たちは号泣して胸が痛んだがなんとか納得してもらつた。

6日目の日にはお別れ会を盛大にしてくれるという、ありがたいな。やつぱりここの人たちのことは大好きだ、それだけは変わらない。それから、親に連絡。

必要最低限の会話しかしていない。

といつても、こちらが一方的に話すだけであちらはただ聞いている

だけ。

唯一話したのは、「そつか」の一言だけ。

それを境に最後の会話は終了した。

それと、家中を空っぽにするのに大分掛かった。
マンションなので家の中のものを根こそぎ片付ければいいのだが、
量が量だ。

全て片付けるのに2日掛かった。

後は最終日まで契約打ち切りの手続きをする。
せっかくだから、貯金を全て下ろしてルーミニアや靈夢たちにお土産
を買つていく。

もっぱら、お菓子とジュース、後はお酒が多数。
大きめのダンボールで10箱は軽くある。
それでも全額使うには至らなかつた。

通帳を見たとき軽く8桁はあつた。

婆ちゃん、貯めすぎ。

これはあとで紫に相談してみるか。

もしかしたら、あっちでも使えるかもしない。

6日目には約束どおり、お別れ会に行つた。

子供たちが次から次へと泣きながら別れを惜しんでくれる。

全員を落ち着かせるのにかなり疲れたが、これでもう心残りは無かつた。

そんなこんなで、最終日。

日曜日の空は透き通るような青空だった。

旅立つには、もつてこいの天気だ。

持ち物は、一週間分の着替えが入ったキャリーケース、愛用のエレキギター、去年の誕生日に婆ちゃんからもらつた調理器具一式とダンボール箱が十数箱。

不意に空間が割れ、隙間から紫が出てきた。

紫「後始末は終わったかしら?」

彩「まだ最後の用事が残つてゐるんだ。すぐに終わるから少し待つてくれないか？」

紫「わかつたわ、後腐れの無いよつとておきなさこ

紫「わかつたわ、後腐れの無いよつとておきなさこ

彩「ああ、あと待つてゐる間にここれ、あつちに運んでおいてくれないか？」

紫「あら、女性に力仕事をさせる気かしら？」

彩「見合つた報酬は出せると想つた？」

紫は小さく息を吐き、

紫「分かつたわ。報酬、期待してゐるから」

言つやいなやダンボールを全て隙間に落とした。やつぱり便利だな。

彩「サンキュ、それとこいつの通帳つてあつちじや使えないとよな？」

紫「当たり前じやない、文明レベルが違うものが

だよなあ、と預金について思案してこると

紫「何なら、換金してあげましょうか？」

彩「マジで？せひそうしてくれ。あと、持ちきれない分は紫が預かってくれ」

「これで、金のほうは片付いた。あと、

彩「じゃ、そろそろこいつて来る。」

紫「ええ、こいつらしあい」

俺は、これが最初で最後になるであらうあいつの家へと向かった。

彩「ここか」

俺は、家から歩いて大体15分くらいのところにある神社に来ていた。

ここにあいつはいる。

あいつにだけは自分の口で別れを告げなければいけなこよくな気がしてここに来ていた。

正直、会いたくない。

だけど、会わずに行つたら絶対後悔する。

そんな確信めいた、勘が働いていた。

両の頬を両手ではたき、腹をくくる。

あいつが居るであろう境内に向けて階段を登り出した。

あいつ、早苗は靈夢と同じような巫女服を着て境内の真ん中で掃除をしていた。

「ちらに氣づくと驚いた様子で掃除を中断し、一呼吸に駆け寄つてきた。

早「アヤじやないですか、珍しいですね。それも、こんなに朝早くから神社に来るなんてやつとうちの信者になる氣になつたんですね」
いつも調子で話しかけてくる早苗、しかしこちらの雰囲氣が違うことに気づくと真面目な顔になつた。

早「何か、大事な用があるみたいですね」

流石に何年も一緒に居ればそれくらいは分かるようになる。
そのことに感謝しつつ、俺はいきなり本題に入つた。

彩「今日は、お別れを言いに来た」

早「…………」

早苗は黙つてこちらを見つめている。

詳細を話しあるまで黙つているつもりだらう。
俺は全てを話した。

これから遠くで暮らすこと。

電気もまともにないから連絡がつかないことなど簡潔に話した。
もちろん、幻想郷の部分やそれに関係するところは全て伏せたうえでだ。

全てを話し終えると早苗が口を開いた。

早「アヤに」とって、そちらはそんなにも魅力的な場所だったのですか？」

その瞳は、嘘をつく」と許さない目だった。
だから俺は、まっすぐに見つめ返し

彩「ああ、最高の場所だった。すげえワクワクしてね」

子供っぽい笑顔で返した。

早「なら、私から言つことはあります。あつちでも、元気でね」
だから俺も、やつときは違う笑顔で
そう言つて、早苗は笑っていた。

彩「俺はまだ」でも元気だよ。早苗「そ俺が居なくなつてから泣くな
よ？」

早「その言葉、そつくりそのまま返してあげる。」

それから、お互に笑いあつた。
もう会えないかもしれないのに、一人はとても楽しげだった。

彩「それじゃ、そろそろいくよ。またな、早苗」

早「もう会えないかもしれないのに、別れの言葉がそれ？」

早苗は少し呆れていた。

彩「もしかしたら、またどこかで会えるかもしれないし、そっちの

ほつが楽しいだろ?」「

早「それもそうね。じゃあ、またね」

彩「ああ、またな」

そつ言ひて、紫が待つているマンションへ走り出した。

紫「用事は済んだの?」

部屋に入ると同時に、紫が出てきた。

彩「ああ、これで思い残す」とはない

紫「やつをよりもこい顔をしてるわ。男の子の顔になつてこない

それが本当なら、あいつに感謝しないとな。

今すぐにでも泣き出したいはずなのに、それをおぐびとも出せば最後まで笑っていた強い少女に。

紫が幻想郷へと続く隙間を開いて一足先に入つていた。

俺は、もう何もない部屋を振り返り

彩「俺も負けていられないな」

誰にも聞こえないようにポソリと言ひて隙間へ入った。

彼が帰つてから私は部屋に閉じこもつた。
今は、誰にも会いたくなかった。

いや、違う。

一人だけ、あいつに会いたかった。
つい先ほどまで一緒に笑つっていた、彼に。

早「危なかつたな」

本当は途中で泣き出したかつた。

泣くなよ? って言われたときは本当に危なかつた。
彼の胸に飛び込んで、泣いてしまったかつた。
行かないで、そばに居てと言つて引き止めてしまつたかつた。
でも、私はそれをしないで笑つて彼を送り出した。
上手く笑えていたかは分からない。

上手く笑えていても彼には無理をしているつてバレているだろう。
分かるのだ。

あれだけ長い時間を一緒に居たから。

彼のことが好きか? と聞かれたら即答でYESと答えるだろう。
だがそこに恋愛感情があるかと言われば微妙なところだ。
いつも一緒に当たり前になつていたから。
だから、本当は半身が切り裂かれる思いだつたのだ。
それでも、泣かなかつた自分を褒めてやりたい。

早「もう、泣いてもいいよね？」

瞬間、涙があふれてきた。

私は泣いた。

何が悲しくて泣くのか分からぬまま泣いた。
だけど、泣いたままではいられない。

このままでは、彼に笑われてしまう。

私は、もうここには居ない彼に向けてつぶやいた。

早「ちゃんと・・・・ヒック・・・・立ち上がるから、前を向くから・・・・

早「今はもう少しだけ、泣かせて・・・・」

それから、泣き疲れて眠るまで私は泣いた。

別れ、そして旅立ち（後書き）

誰でも、親しい人の別れは辛いですよね。
でも、それを乗り越えてこそ強くなれると思つ。

誤字等、訂正箇所がありましたらおねがいします

修行と云ひの・・・無茶振つ? (前書き)

やつと、研修が終わった。
今日から投稿再開です。
それではどうぞ。

修行ところの・・・無茶振り?

side 彩人

博麗神社の境内、突如として空間に亀裂がはしる。いわゆるスキマである。

それは、音もなく広がっていき中からはこのスキマを作り出した張本人である八雲紫が出てくる。

ついで、元いた世界から幻想郷へと移り住む少年、狂咲彩人が出てきた。

外、現代での後始末を終え、紫と共に幻想郷へと帰ってきたのだ。

彩「ここは、博麗神社か？」

紫「そうよ、今日からここで修行するのよ。まさか忘れたの？」

彩「いや、覚えてるよ。で、具体的にはなにをするんだ？」

ここで生きていくためには弾幕を打てる事と、空を飛ぶことが必須になつてくる。

人里で生活する分には必要ないのだが、できて損はないのでこちらとしてもありがたい。

それに空を自由に飛ぶつて全人類の夢だし。

紫「それを教えるのは私の役目じゃないわ。じゃ、私は帰つて寝るから後は靈夢に聞いて」

そう言って、スキマへと入つていく。

その姿を見送りながら俺はお礼を言った。

彩「紫、いろいろとありがとうございました。それから、俺をここに連れてきてくれてありがとうございました。」

自分が今できる最高の笑顔を紫に向けた。

紫は胡散臭い笑みではなく見た目相応の美しい笑顔で、

紫「どういたしまして。それと、幻想郷へよひにね。」

そう言つて、スキマは閉じられた。

と思つたら、再度開き上半身だけ紫が出てきた。

紫「そうね、今日は宴会ね。私の家族も連れてくるから。報酬、楽しみにしてるわよ？」

そう言つて今度こそ帰つていった。

彩「さて、靈夢はどうに取るかな？」

俺は、修行を手伝つてもうべく靈夢を探した。靈夢と魔理沙は縁側でお茶を飲んでいた。

彩「ただいま、靈夢に魔理沙。」

靈夢たちのところに行き、帰つてきただけを告げる。

靈「あら、お帰りなさい。いつ帰つてきたの？」

彩「つこせつきだ。ルーニアは？」

魔「あいつなら、お前が後片付けに行つたあとすぐにつラフラとどつかに飛んで行つたぜ」

と、魔理沙が答える。

まあ妖怪だし、だいじょぶかと納得していると靈夢が口を開いた。

「彩人は今日からここに住むわけだけど、部屋は客間が開いているからそこ使って。あと、分かってると思うけど家事は当番制だからね」

アーリー・エイジズの「アーリー・エイジズ」の「アーリー・エイジズ」。

まあ、居候の身だし家事は得意中の得意だから文句ないけどね。

彩「ああ、分かつた。じゃ、早速だけど空の飛び方から教えてくれ」

גָּמְןִי - וְעַמְּדָה

実はさつきから早く空を飛べるようになりたくてうずうずしてたの

それが伝わったのか、靈夢はクスッと笑いながら

靈「その前にこの幻想郷のこととスペルカードルールについて説明するわ」

確かに、この幻想郷で生きていくのだから、このことはよく知つておかなければならぬ。

彩「分かった。それじゃあ教えてくれ」

少女説明中・・・
少年静聴中・・・

靈「と、まあこんなかんじね」

要訳すると幻想郷は、人間、妖怪、妖精、神が種族に関係なく存在している世界らしい。

妖怪は人を襲い、人間は妖怪を退治するのが普通だ。

しかし、幻想郷では人間に友好的な妖怪も数多く存在する。

そうすると、人は妖怪を恐れなくなり、妖怪が存在できなくなってしまう。

妖怪とは、人の恐れから生まれたものだからだ。

また、妖怪のほうが比率が多いらしく力の強い妖怪は暇を持て余しやすくなるのだそうだ。

そこで、考え出されたのがスペルカードルールだ。

これは、スペルカードに自分の技などを込め必殺技のようにしたものである。

そして、互いに弾幕を打ち合い美しさを競うのが弾幕ごっこである。

これにより妖怪たちは暇を持て余すことが少なくなつたらしい。

さらに、力の強い妖怪と人間が対等に渡り合つことができるようになる狙いもあるらしい。

欠点といえば争いが起こりやすくなつたことだろうか。

ちなみに死ぬことはないが不慮の事故というはあるみたいだ。

彩「なるほどな、すつじく楽しそうな世界だつてことが分かつた」

その答えに少々呆れたようだが靈夢はおもむろに立ち上がつた。

靈「まつたく、そろそろ弾幕の撃ち方と空の飛び方でも教えましょ
うか？」

魔理沙と俺は待ってましたと言わんばかりに立ち上がり、境内に出
た。

靈「さて、まずは空の飛び方だけぞ・・・」

靈夢はいきなり困った顔をした。

どうしたのか、と聞くと

靈「いや、教えるって言つても私が飛べるのは【空を飛ぶ程度の能
力】のおかげだからどうしたらいいのか分かんない」

いきなり手詰まりである。

魔理沙は笑つているし。

靈「と、とにかく自分が飛ぶよつたなイメージを思い浮かべてみなさ
い！私の勘がそうしろつて告げているわ」

魔理沙に笑われ、少しむくれている靈夢に苦笑しつつ言われたとお
りにやつてみた。

すると、

彩「浮いた！？」

自分のイメージどおりに体が宙に浮いていた。

靈「ほら見なれー！」

と、靈夢が胸を張る。

いろいろと試してみたが、どうやらイメージが明確にできるから成功したみたいだ。

浮くまでが大変らしく、空中で動くことはそれほど難しくはないみたいだ。

あとは、飛んで体に覚えさせるしかないらしい。

ちなみに、浮いたからテンションが揚がりすぎて30分ほど飛び回つたところで靈夢から止められた。

靈「さて、飛ぶことができたから次は弾幕ね。私みたいにお札に靈力を込めて放つてもいいし、魔理沙みたいにマジックアイテムを媒体にしてもいいし、靈力や魔力を弾の形にして放つてもいいわよ」

そういうと、靈夢と魔理沙がお互いに撃ち合つて見本を見せてくれた。

考えた結果、好きな形で撃てるのを靈力や魔力を弾幕にして撃つことにした。

彩「で、どうやって撃つんだ?」

魔「靈力や魔力を弾になつて放つイメージで念じればいいんだが」

言われたとおりにやつてみる。

前方5方向に丸い形の弾幕を1方向あたり50発ほど放つイメージで力を練る。

今回は靈力で撃つてみる。

イメージはできた、あとは力を放出するだけ。

ドビドビドビドビドビッ!!

イメージ通りの弾幕が出た。

彩「おおつーできた！なあ靈夢、魔理沙、こんな感じでいいんだよな？」

弾幕がイメージどおりに出せたので興奮していくと、

靈「まさか、たった数十分で撃てるよ！」なるなんて

魔「本当に外から来たのか疑いたくなるな」

二人は、はしゃいでいる彩人を見ながら呆れていた。

そろそろ、お昼の時間なので修行は中断し昼食を摂った。

昼食は靈夢が作ってくれた。

夜は俺らしい。

昼食後、俺は白紙のスペルカードを前にしてスペルの作成に勤しんでいた。

彩「避けづらこものに」しようとしたら、やっぱ大量にそれでいてランダムにぱら撒くようにすればいいナゾそれだと綺麗じゃないしな・・・」

といふいふ、考えた結果何とか一枚作ることができた。

魔「おつ？できたのか？」

彩「まあ、とりあえず一枚できたよ」

魔理沙が様子を見に来たのでとりあえず完成したことを見ると、

とんでもない事を言に出した。

魔「よし、それじゃあ弾幕『じゅつまく』『せんべい』」

彩「は？ ナーイッシュンノ？」

思わず字がカタカナになってしまふくらい意味不明だつた。
俺が、魔理沙と、弾幕『じゅつまく』？ ハハハッ、いくらなんでも勝てるわ
けねーじやん。

ああ、目がやる気満々だよーのト。

魔「手つ取り早く弾幕と空を飛ぶのに慣れるには実践が一番だぜ」

嘘だ、絶対面白がつて言つてやがる。

どうやら、拒否権は無いみたいなのでため息をついて縁側から外に
出た。

靈夢はちやつかりお茶とせんべいを出して傍観者を決め込んでるし。
ある程度の高度まで上昇し、魔理沙がルールを言い出した。

魔「使用スペカは一枚、相手が降参あるいは戦闘不能になつたら終
了だぜ」

彩「ハア、手加減してくれよ」

魔「そいつは無理だぜッ！！」

その言葉を合図に弾幕『じゅつまく』が始まった。

俺は、適当に魔理沙に向けて弾幕をばら撒いた。

魔「そんなんじや、当たんないぜ」

そりやそうだ、当てるつもりなんてないからな。

これはいわば様子見、魔理沙は油断してたからそこを上手く突かないとこちらに勝機は無い。

魔「今度はこっちから行くぜ」

星型の弾幕がこちらに向かつてくる。

が、全てどの軌道で飛んでくるか分かる。

どうやらチルノとの一戦で弾幕の流れが読めるようになつたらしい。
弾幕が通らないところは簡単に分かるがわざと大きく避ける。
最小の動きで弾幕をかわし続けたら魔理沙も警戒するだらうしな。
だからわざと大げさに避ける。

魔「なかなかやるな。じゃ、そろそろ使わせてもらひつぜ」

魔理沙がスペ力を構え宣言する。

魔「魔符『スター・ダスト・レビュー』」

瞬間、大量の星屑が周囲に撒き散らされる。

大きさは大小さまざま、軌道が分かつていても飛ぶのに慣れていないため回避に限界がある。
仕方が無い、使うか。

彩「流星『スター・ダスト・レイン』」

上空から大量の星型弾幕が広範囲に落ちてくる。

それは魔理沙の弾幕を次々と相殺し魔理沙目掛けて落ちてゆく。

魔「なつ！ わつ！ わわつ！」

何とかかわしていくのがそのままじやそのうち被弾するだろ？ だがまだ油断はできない。

どちらもスペカがあと一枚残つてているのだ。

ここで一気に決めたいところだが経験の少ない中で先に手札を切るのは得策ではない。

魔「ちいっ、これでまとめて吹き飛ばしてやるぜ」

魔理沙がスペカを構えた。
俺もスペカを構える。

そして、同時に叫んだ。

魔「恋符『マスタースパーク』」

彩「狂咲『桜花爛漫』」

魔理沙が小さな箱のようなもの、八卦炉つて言つたか？ を構えた。
そこから、極太のレーザーが放たれる。

対して、こちらは桜の花びらを象つた無数の弾幕、それこそ視界が花びらで埋まるほどに大量の弾幕が広範囲に展開される。
この花びら一枚一枚に靈力または魔力を込めてるので、当たり判定があるからまず避けきる事など不可能だ。

その分燃費がものすごく悪いけど。

魔理沙のレーザーと俺の桜吹雪がぶつかり合つ。

双方互角で拮抗していたが、徐々にこちらが押され始める。

魔理沙はあのレーザーを維持するために動けないはず。
対して、こちらは動ける。
なら取るべき行動はひとつ。

魔「まとめて、吹き飛べええええええ！」

魔理沙がさらに火力を上げ、ついに桜吹雪に風穴が開き霧散していく。

そこに彩人の姿は無かつた。

魔「せえ、せえ。や、やりすぎちまつたか？」

魔理沙は息切れを起しぶししながらも彩人の姿を探した。

彩「まったくやりすぎだ。初心者相手になんつうもんぶつ放すんだよ」

魔「！－！」

俺は魔理沙の背後にまわって弾幕を形成したまま話す。

彩「これで、チェック・メイトだな？魔理沙」

勝つたことが何よりうれしくて自然と笑みがこぼれる。

魔「まいったな、降参だぜ」

魔理沙は両手を挙げて負けを認めた。

靈「お疲れ様。魔理沙に勝つなんてやるじゃない」

縁側まで降りていくと、靈夢が賞賛の言葉をくれた。

彩「サンキュー。でも、実力で勝ったわけじゃないし。何より、魔理沙が油断してたから勝てたんだよ」

魔「くそー、まさか負けるなんて思つてもみなかつたぜ」

俺は靈夢の言葉に苦笑し、魔理沙は悔しがつていう。

彩「わて、そろそろ夕飯の用意でもするか

靈「えつ~もひ~咲くないかしら?」

現在時刻は4時を少し過ぎたあたり、初夏で夕飯の準備にしては早すぎる時間帯である。

彩「今日は、紫と紫の家族も来るからな。あと、荷物を運んでくれた礼をすうつて約束したから豪勢にいきたいんだ。それに・・・」
と言いかけて、台所へ行こうとした

彩「ルーニアも来そうだしな。ま、ちょっとした宴会になるんじゃないか?」

そつ言い台所へ向かう。

その背中に靈夢と魔理沙は、

靈「そりまでも言つこなう・・・」

靈・魔「期待してゐるわよ(ば)ーーー。」

声をそろえて、期待してきました。
仲良いなと思いながら、

彩「期待された！」

おどけた調子で答えた。

修行と云ふのは・・・無茶振り? (後書き)

弾幕ごつこが上手く表現できない・・・オーナー

再会、そして宴会へ（前書き）

今回は、宴会が始まるまで、です。

ネタはあるのに、それを表現できるくらいの文才がほしいっつーー！

再会、そして宴会へ

side 彩人

俺は今台所に居る。

今晚の宴会に出すための料理を今から作るといつだ。
が、ひとつ不安要素がある。

彩「釜戸…だと？」

そう、釜戸だ。

確かに紫は文明レベルが違うとは言っていたが、釜戸か。
できることは無い、釜戸の使い方も婆ちゃんに教わった。
だが、使い方を知っているのと上手くできるかは別問題だ。

彩「ま、成るよくななるっしょ」

こうして考えていても始まらない。

なら前に進んだほうが何倍もマシだ。

上手くできるかはわからぬ。

分からぬからこそ、やってみる価値がある。

失敗したとしても他の料理でどうにかする方法もあるし、幸い食材
はたくさんある。

彩「さて、と」

小学生のときに作った黒地に龍が描かれているエプロンを着け、頭
には百均でもよく見かけるバンダナ（色は赤）を巻く。

婆ちゃんにもらつた調理器具一式の中の愛用の包丁（日本刀を作つてゐる人に特別に作つて貰つたものらしい）を構える。準備万端、いつでも始められる。

彩「これより、調理を開始する」

俺は、料理を作り始めた。

side～魔理沙～

私は、宴会まで暇だつたので彩人が作つてゐる料理をつまみ食いしよつと台所までやつてきていた。

魔「あれだけ自信満々で言われたら誰だつて気になるつてもんだぜ」

自分たちの前で堂々と言い切つたのだからそれなりの腕なのは伺える。

だからこそ、どれほどなのか一足先に知りたくなつたのだ。

魔「彩人が気になるような言い方をするからいけないんだ。だから私は悪くないんだぜ」

自分の行動を正当化しつつ台所に着いたので中を覗いてみる。中では、信じられないことが起きていた。

彩人は、パツと見5～6人分の作業を一人でこなしていた。その動きには無駄がない。

食材を切り、釜戸の火加減を見る。

味付けをし、切った食材を炒め始める。

できた料理を器に盛り付け、空いた食器や鍋を洗っていく。

このような作業を全部一人で捌いているのだ。

魔「これは、すごいぜ・・・」

私は、しばし調理の様子に見とれていた。

彩「ん？魔理沙か、どした？」

彩人がこちらに気づいた。

いきなり声を掛けられて驚きつつ、なんとかごまかす。

魔「えつ、いや、な、何でもないんだぜ～」

あはは～と目が泳ぐ。

彩人は何かに気づいたらしく、悪戯っぽく笑うと、

彩「つまみ食いに来たんだる？」

魔「なつーー！」

図星を指されて頬が少し赤くなつた。

彩「その反応は、どうやら図星みたいだな」

と、からから笑う。

なんとか反論しようかとあれこれ考えていると、彩人が

彩「魔理沙、味見してくれないか?」

と、言つてきた。

つまみ食いに来たのにあちらのほうから食べててくれと言つてきたのだ。

やつぱり面白い奴だなと思い、せつかくの誘いなので
魔「それじゃ、この魔理沙様が味見をしてやるからありがたく思う
んだぜ」

彩人は煮物を小皿に乗せて持つてきた。

彩「筑前煮つて言つんだけど氣に入るかな?」

と言い、煮物を箸で持ち上げ口元まで持つてきた。

彩「はい、あ～ん」

私の思考は停止した。

これは、いわゆる『あ～ん』つてやつだ。
あの、仲のいい男女がやるつていう。
つて言つて今言つてたし。

私がフリーーズしていると、

彩「どうしたの? 冷めないうちに食べなよ」

彩人がニヤニヤ笑いながら言つてきた。
絶対分かつてやつてるな。

仕方ない、少し恥ずかしいけど食べると言つてしまつた以上食べる
しかない。

私がそう決心した時、

靈「おひ、おこしや。」

パクッと横から靈夢に食べられてしまつた。

「！……ッ、すういおいしいー！」

靈夢が田に見えて分かるくらいに驚いている。文字通りほっぺが落ちそうなくらい頬が緩んでいるし。

彩人はうれしそうに笑つて調理を再開した。

靈「…」んなに上手なら、毎日作つてもうおうかしりへ。」

靈夢は今朝の当番製という言葉を早くも撤廃しようが本気で考えて
いる。

魔 「れいむ」

靈「あら魔理沙、まだいたの？邪魔になるから縁側でお茶でも飲んで待つてましょ」

この巫女は悪びれる様子も無く縁側に戻っていく。

魔「私の煮物・・・」

「ああ、あれ? とってもおにしかったわよ」

靈夢は満面の笑顔を咲かせる。

その笑顔に腹が立つたので、

魔「靈夢、弾幕『じつ』で勝負だ。食べ物の恨みは怖いんだぜ」

「いいわよ、今は気分がいいから相手してあげる」

私は靈夢に恨みをぶつけるべく空へと舞い上がった。

side～彩人～

靈夢と魔理沙が弾幕『じつ』を始めてから数刻、だいたい料理が作り終わった。

作ったものは、枝豆や焼き鳥、焼き魚各種、シーザーサラダや揚げ物、etc.とにかくつまみはいろいろ作った。あと、ご飯ものでいなり寿司なんかも作った。

何故かつて？好きなんだよ、悪いか？

あとはお酒をいろいろ出して、料理を並べて準備オッケー。靈夢たちも終わったようで、空から降りてきた。

「あら、準備が終わったのね？」

「ああ、お一人さんがじゃれあつていてる間にね」

「おおつーす」いな。これ全部彩人が作ったのか？」

靈夢も魔理沙も降りてきて早々、早く食べたいのかそわそわしている。

彩「そろそろ、来る頃だと思つけど・・・来たな」

空間に亀裂が走り、中から紫が出てきた。

紫「こんばんは、報酬を受け取りに来たわ」

紫はいつもと同じ胡散臭く笑いながら言った。

彩「チャオ、今夜は騒がしい夜になりそうだ」

対して、俺はどこか遠くを見つめながら返した。

紫「さて、私の家族を紹介するわ。一人とも出ていらっしゃい」

そう言って、紫がスキマを開く。

中からは、見事なり本の尻尾を生やした紫に負けず劣らずの美人さんが出てきた。

藍「はじめまして、私は紫様の式の八雲藍だ。」

藍と名乗った少女はこちらに手を差し伸べてきた。

彩「俺は狂咲彩人。よろしくな、藍さん」

俺は、差し伸べられた手をしっかりと掴み返した。

藍「よろしく。あと私のことは藍でかまわない、私も彩人と呼ばせ

てもらつ。敬語も無しだぞ」「

そう言って藍はやわらかく笑った。

紫と違つて、胡散臭さは微塵もない笑顔だった。

藍「さ、榎。お前も挨拶なさい」

そう言つた藍の後ろからは一本の尻尾を生やした猫耳の女の子が出てきた。

その耳には金の輪っかを着けていて頭には緑の帽子を被つてゐる。その少女はもじもじしながら俯いて時折こちらをチラツと見てくる。

藍「ほら、恥ずかしがつてないで挨拶は?」

藍が優しく催促する。

が、少女の反応は変わらない。

藍は困惑しているようで、心配そうに見ている。

ということは、普段と違う反応をしているということだ。

つかこの子つて、もしかして。

そう思い立つた俺は少女の目線の高さに合わせ、頭を撫でながら言った。

彩「道を教えてくれてありがとね。おかげで無事にたどり着けたよ」

そういつた瞬間、少女が驚いたようにこちらを見る。

どうやら正解だつたようだ、そしてやつと目線が交差した。

彩「俺は、狂咲彩人。君の名前を教えてくれるかな?」

俺は、あの時と同じ声音で少女に聞いた。

橙「あ・・・ちえ、橙つていいます。藍しづかの咲です！」

その答えに満足し、改めてお礼を言った。

彩「そつか。橙、改めてありがとうございます。おかげで迷わずこすんだよ」
穏やかに微笑みながら頭を撫でる。

橙「い、いえ。お役に立ったのならよかったです／＼／＼

やつて頬を朱に染めて俯いてしまった。

橙「あの、どうしてわかったんですか？」

橙は、不思議そうに聞いてきた。

彩「確信があつたわけじゃないよ。ただ、あのときの黒猫に雰囲気が似てたから、もしかしたらとおもつてね」

そう言つて、橙の頭を撫でた。

橙は恥ずかしいのか、また俯いて藍の後ろに隠れてしまつた。

紫「橙と知り合いだつたのね」

紫が意外そうな顔で聞いてきた。

彩「ああ、博麗神社への道を教えてもらつたんだ。」

紫「そう。橙、いじ苦勞様」

紫が橙の頭を撫で、
橙は気持ちよさそうに目を細めた。

彩「さて、料理の盛りはできているから案内するよ」

そう語りて紫たちを案内しようとしたとき、

「あれ？ 今何か聞こえませんでしたか？」

橙が耳をピクピクさせながら語つた。

સાધુબાળ પ્રાણી જીવનાની કાર્યક્રમી

藍一 確かに聞こえるな。誰かを呼んでいるみたいだ

藍にも聞こえたようだ。

ピクピクをねじる。

その晩はだんだんと遅づいてくる。

? 「あ――や――・・・おおおおお――」

彩「この声は……！」

自分にも聞こえるくらい近づいてきた声は聞き覚えのあるもので、

ル「あ――や――と――!」

ズドッ！！！

という音とともに金髪の少女、ルーミアが抱きついてきた。

外見は少女でも中身は妖怪、人間である自分には車が衝突したのと同じくらいの衝撃が走った。

流石にまともに受け止められないでの、能力で流れを読んでそれに合わせて後ろに飛び衝撃を1／10くらいまで軽減した。

集中しないとまともに読めないレベルでまだまだ使いこなせていい。

軽減しても軽く2～3回バウンドしたしね。

ルーミア、次はもう少し加減してくれ。

胸に顔をうずめて抱きついている少女の頭をポンポンなでしながら

彩「ただいま、ルーミア」

ル「おかえり！…彩人」

そう言つてお互いに笑い合つ。

ルーミアはそのまま首に手を廻し自分の頬を俺の頬に押し付けてきた。

ムニムニとした感触が気持ちいいが、力の入り具合から満足するまで離してくれそうもないの、ルーミアを抱っこし今度こそ靈夢と魔理沙のいる居間へと向かった。

その途中、紫が

紫「貴方たち仲良いわね」

と言つてきた。

まあ、確かに傍から見れば仲の良い兄妹に見えるかもしれない、実際俺はルーミアのことが気に入っているし。

が、ルーニアがどう思つてゐるかまでは分からぬ。だから、自分に抱きついてゐるルーニアに聞いてみた。

彩「ルーニア、俺の」とじう思つてゐる?」

ル「お兄ちゃんみたいで大好き!—!」

満面の笑顔で即答した。

彩「ありがと、俺もルーニアのこと大好きだよ」

その答えにうれしさと恥ずかしさを感じつつ愛しいものを扱つよう抱えなおした。

彩「といつわけで、俺もルーニアもお互いが大好きつて事が分かつたぞ、紫」

別に聞かなくても今までの行動から十分すぎるほどに分かることがあって言葉にしたかった。
そういう気分だったのだ。

紫「やつぱり貴方を選んで正解だったわ」

そう言つて紫は笑つた。

その顔にいつもの胡散臭さは無く、見た目相応の綺麗な笑顔だった。
紫の笑顔で藍と橙もうれしそうに笑つた。

靈「あつーあつと来たのね。もつ、せつかくの料理が冷めちゃうじやない」

話しているうちに居間につけたようだ。

靈夢と魔理沙は人数分のお椀と箸を準備して待っていた。

彩「『めん』めん。さ、全員そろつたことだし始めますか?」

そういうて各自席に着く。

ちなみに、俺 ルーミア 靈夢 魔理沙 紫 藍 橙の順番でテーブルを囲んでいる。ルーミアは俺の膝の上ね。

紫「それじゃ、私が乾杯の音頭を取るわ」

なんか、さつきまで無かつたはずのお酒が入ったコップが置かれているし、皆平然とコップ持つてるし。

紫「彩人が幻想郷の住人になつたことを祝して乾杯!!」

彩・靈・魔・藍・橙・ル「「「「「乾杯!」」」」

こつして小さな宴会が始まった。

再会、そして宴会へ（後書き）

なかなか話が進まない。

100話超してる先人たちはすごいっすね！

感想・誤字指摘待つてます。

一気飲み、ダメ、絶対（前書き）

今回は、短いです。

お酒はアルコール度数20から（嘘）

それでは、ビギー

一気飲み、ダメ、絶対

Sides 彩人

ル・橙「いただきま～す」

乾杯の声のすぐ後、橙とルーミアは手近にある料理に箸を伸ばした。 橙は焼き魚、ルーミアは筑前煮を選んだようだ。

ル お い し 一 一 ！

相当気に入つたらしく、あつという間に一皿空けてしまつた。

彩一 気に入ってくれたかな?』

ル——ん、今まで食べた物の中で一番好い!」

彩一あじかと
たくさんあるから、少しは食べてね

ルーニアは大きく頷くと、今度は蒸した鶏肉とトマトのサラダ～レモンとバジルのドレッシングがけ～を食べ始めた。

橙の方を見でみると、ヒザの上手く魚の骨が取れなくていた。

彩「橙、まずは背中に沿つて箸で切れ目を入れるんだ。そうすると上の部分は骨が少なくて食べやすくなるよ。上を食べたら今度は・・

•
L

見かねたので一通りの食べ方の見本を見せた。

焼き魚が数分で骨と身とはらわたに分けられる。

それを見た橙は、

「うわー、すごい。私もできるかな？」

とても感動した様子で目をキラキラさせながら聞いてきた。

彩一練習すればきっとできるよ。ほら、俺の分も食べな」

そう言つて、自分の分も差し出す。

「ん～～おいし～～っ！」

やはり猫だけに魚系は大好物のようだ。
あつという間にあげた分を食べ終え、自分の魚の骨を取りにかかる。
一人には自分が作った料理は口にあつたみたいだ。
問題は紫の方、自信はあるがやはり不安もある。
俺は、紫の方を向き

彩「紫、労働に見合った報酬にはなりえるかな?」

あんまり壁へをいいでる紫に隠してみた

紫は何も言わずただ咀嚼し、そして飲み込んだ。

「正直予想以上よ。これなら、お釣りを出してもいいくらいだわ」

べつから、心配する必要は無かつたみたいだ。

これだけ喜んでもらえたのなら料理人冥利に尽きるというものだ。
料理人じやないけど。

靈「あつ！魔理沙それあたしのおでん、返しなきこよ～」

魔「へへ～んだ、昼間のお返しだぜ～」

向ひつでは靈夢と魔理沙が互いの料理を奪いあつてゐる。いっぽい作ったから、盗り合わなくともいいのに。といつても無駄なので放置しておく。

彩「さて、俺も食べようかな～。いなりはど～だ～？」

いなり寿司を探すが見当たらない。

おかしいな、山になるように積んだからすぐ見つかると思つたんだけど、と思つていたらあつた。

あつたはいいが、多めに作ったはずのいなり寿司が1～2ほどになつていた。

えつ？まだ30分も経つてないのにもう無え。
どうやら、そのひつの中の半分は藍が食べたようだ。

彩「藍もいなり寿司が好きなの？」

藍「ああ、といつより油揚げが好きなんだ。も～つて～とは彩人もか？」

彩「ああ、大好きだ。一番作つた回数が多いかもな」

藍「そうなのか、よければ今度教えてくれないか？私も作れるがここまでものは、なかなかできないからな」

彩「じゃあ、今度一緒に作るつぜ」

藍「わかつた、約束だぞ」

藍はうれしそうに笑つたが頬に「」飯粒が付いていた。

彩「藍、動かないで」

そう言つて、藍の顔に手を伸ばす。

頬についた「」飯粒を取りそのまま自分の口へと運んだ。

彩「うん、これきれいになつたな」

藍は呆然としていたが、ハツと我に返ると顔を赤くしながら抗議してきました。

藍「い、いきなり何をするんだ／／／」

彩「えつ～」飯粒とつてあげただけだけ?」

藍「いや、そうじやなくて・・・」

動搖しているのか上手く頭が回らないようで頭を抱えている。

その反応が面白かったので少しニヤニヤしながら追い討ちを掛けてみた。

彩「藍つてなかなかに可愛」ところがあるんだな

藍「なッなな何を言つているんだお前は／／／」

今度は先程よりも赤く染まつた頬を押さえながら皿をそらす。

藍「お前、結構イジワルなんだな」

彩「"いめだ"いめん、機嫌直してくれよ」

彩「でも藍が可愛いつてのはホントだぞ?」

そう言つたらまた顔を赤くした。

しばらくはそんな感じに盛り上がっていた。

だが、どこの宴会でも中盤に差し掛かると執拗に絡みだす奴は必ず居る。

魔「いよ~う、彩人~飲んでるか~?」

彩「また分かりやすい酔い方してんな。靈夢はどうした?」

魔「外に涼みにいってるぜ~。それよりも何で飲まないんだ~?」

魔理沙が肩を組んでくる。

いちいち酔っ払いのテンプレ的セリフを吐いてくる。正直うぜえ。
ちなみに、俺は未成年だが適度な飲酒は体にいいと婆ちゃんに言われ15歳頃から呑んでいるので問題ない。

彩「ちやんと、呑んでるよ。適度にな」

別に弱いわけじゃない。むしろ強い方だと自覚もある。

ただ、片付けを誰がやるか考えれば分かるだろ?

魔「そんなんじゃダメだぜ~。私が酌してやるから呑め~」

彩「いやだから、俺はツー？！」

ガシツと後ろから羽交い絞めされた。

靈「ほりほり、あんたも飲みなさいよ～」

いやほは～と靈夢が笑う。

この一人、絶対悪酔いしてると。

目が据わってるもん。

紫と藍は外で月見酒と洒落込んでるし、ルーニアと橙は寝てるし、あれ？詰んだ？

魔「よーし、一気飲みに挑戦だ～」

そつ言つて魔理沙が取り出したのは40度はあるバーボン。は？それを一気飲みしろと？無理無理、明日が恐一よ。

彩「ま、魔理沙とりあえず落ちつ・・・ツムグウ」

酒が一気に胃の中へと下る。

さすがに一気飲みするような酒ではないのただんだんと意識が遠退いて来た。

靈夢、魔理沙後で覚えておけよ。

そして、意識が完全に暗闇へと沈んだ。

一気飲み、ダメ、絶対（後書き）

お酒は20歳になつてからですよ～。
あと、一気飲みは下手すると死んでしまうので絶対にやらないで下さい。

感想・誤字訂正まつてます。

夢の中での約束～dream sides～（前書き）

最近閲覧してくれる人が増えてきました。
うれしいです。

それではどうぞ

sides(彩人)

彩「んあ？ビードー？」

目を開けると、何時の間にやら真っ白い空間に突っ立っていた。せつきまで宴会をしていたはずだが、記憶を探るとせつきの出来事が思い出される。

彩「たしか、酔った靈夢と魔理沙に無理矢理酒を流し込まれてそれで・・・氣絶したのか」

酔った感覺は無いが頭痛がしてくるような気がする。起きたら確実に一日酔いだ。それも強烈なやつ。

あいつら、絶対覚えてるよ。

起きたときはそのとき考えるとして今は目の前の事に頭を切り替える。

彩「この空間は前と同じものか？確か前は・・・ツツツ・・・？」

瞬間、背中にものすごい衝撃が走った。

不意だったので受身を取ることもできず、イチローのレーザービームも真っ青な感じで吹っ飛んでいく。

何メートル跳んだかも分からなくなるくらいの距離を飛び、最後に思いつきり滑つてようやく静止した。

これが夢の中じゃなかつたらぶつかつた時に四肢がもげてたな、と笑えないことを考えながら立ち上がり後ろを向く。

綺麗な虹色の飾りがついた羽のようなものが見え、それがパタパタと動いている。

それだけで、何が起きたか理解できた。

俺は何とか立ち上がって、体に巻きついている腕を優しく解き少女へと向き直った。

少女は俯いていて、その表情は見えない。

だけど、背中の羽を見れば十分だ。

彩「よう、フラン。いい子にしてたか？」

俺はフランに話しかけた。
だが、フランは黙っている。

どうしたの？と聞こうとしたら、不意にフランが口を開いた。

フ「彩人だよね？」

彩「ああ、そうだぜ」

フ「ホントに彩人なんだよね？」

彩「ホントに、彩人だよ」

フ「フランはまだ俯いていた。

背中の羽はだんだんと落ち着いてきて、今は止まっている。

フランは一步一步ゆっくりと近づいてきた。そして・・・

フ「彩人、会いたかった！」

目尻に涙を溜め、抱きついてくる小さな身体。

彩「俺も会いたかったよ、フラン」

それを柔らかく受け止め、頭を撫でる。

フ「ねえ彩人、私ね力を上手くコントロールできるように練習して
るんだよ」

彩「そうなのか？それなら俺と同じだな」

フ「彩人も？」

彩「俺も弾幕の打ち方とか空の飛び方、能力の使い方を練習して
るんだよ」

フ「そうだな、じゃあ一緒に頑張ろうね！」

彩「そうなんだ、夢の中なら限界も無いだらうしな」

俺とフランは夢の中で一緒に修行する約束をした。
夢の中で修行することで一人とも完璧に力を扱えるようになるの
がそれはまだ先の話である。

それからまた一人でお話をした。

互いに住んでいる場所や最近の出来事などを話した。

フ「ねえ、彩人には兄弟つて居る？」

フランが唐突に聞いてきた。

その表情はどこか寂しそうな、悲しそうな顔をしている。

彩「俺には居ないな。フランには、兄弟いるのか？」

フ「お姉さまが一人いるよ、紅魔館の主で私の唯一の肉親。でも・・・」

そのままフランは俯いてしまつた。

俺は先を促さずフランがしゃべりだすのをじつと待つた。

フ「お姉さまはきっと私のことが嫌いなんだ」

フランの声は震えていた。

ギュッと服を握る手に力がこもる。

彩「どうしてそう思うんだ?」

俺は優しく聞いた。

だいたいの理由は予測できるがあくまで予測だ。

フランの口から聞くまではなんとも言えない。

フ「だって、私を地下室に閉じ込めたのはお姉さまだから」

やつぱりな、唯一の肉親に拒絶とも取れる行為をされたら誰だってそう思う。

でも、

彩「それは、本人の口から直接聞いたのか?」

フ「聞いてないよ、聞けるわけないもの。だって、お姉さまは私に会いに来てくれないッ！！」

とうとう、フランの頬に涙が流れ始めた。

フ「どうして、どうしてお姉さんは私に会いに来てくれないの？私、ずっと待ってるの」と。」

フランの感情が爆発している。

水を溜めたダムが決壊したように感情の本流が止め処なく溢れる。

フ「ずっと、ずっと、ここに来てくれるのを信じて待っているのここ・・・」

フ「どうして来てくれないの？」

俺は黙つて聞いていた。

確かに胸糞悪い話だ。腸が煮えくり返るほどだ。

恨まれても文句は言えない。それだけのことをしている。

彩「フランは、姉ちゃんのこと嫌いか？」

その問いかけにフランは驚いたように顔を上げた。

驚いたからか涙まで止まっている。

ちょっと意地悪なこと聞いたかな？と思いつつも

彩「フランは、姉ちゃんのこと本当は大好きなんだろ？大好きなんだけどそれを伝える機会が無いからどうしたらいいか分からない」

フランの頭を撫でながら続ける。

彩「別に地下室に閉じ込められていることについてもそこまで怒つてない訳じゃない、自分を拒絶しているわけじゃない本当は守ってくれているって分かっているから

「

彩「だけど、もひとつ姉ちゃんと仲良くなさって、一緒に居たいけどそれができないから拗ねてるだけなんだよな？」

フランはポカソと口を開けて固まっている。
よつやく搾り出した一言が

フ「どうして……？」

だつた。その一言には全ての疑問が含まれている。
だから、一つ一つ答えた。

彩「だつて、兄弟姉妹を本氣で恨めるわけない、ましてやフランは優しいからな、姉を本氣で恨むなんてできない」

彩「姉が館の主つて立場を考えたら力の使い方が分からぬ」フランを自由にさせておくわけ無い、体裁があるだろ？」

そして最後に

彩「なにより、フランが俺に甘えてくるのは姉に甘えられない反動つてのもあるんだろ？」

悪戯を思いついたような顔でフランに問いかける。

フランの顔が朱に染まり、顔を隠すよつに抱きついてきた。

フ「まだ知りあつてから2回田なのに私のこと見てくれてたんだ？」

確かに、フランと触れ合つた時間はかなり短い。

彩「時間なんて関係ないよ。そいつのことを本気で知りうるすれば30分でもかなり分かるよ」

フランはしつれしそうに笑い、ぎゅーっとじっときたのでお返しとじばかりにこじからもぎゅーっと抱きしめ返した。

そして、一つ提案をした。

彩「なあフラン、俺が迎えに行つたらさ、姉ちゃんに自分の気持ちを伝えてみないか？俺も一緒にいくからや」

その言葉にフランは少し考へ、

フ「彩人が一緒に行つてくれるなら、少し恐いけど伝えてみる」

そう言つたフランの目には決意の色が窺えた。
一人の体が徐々に透けていく。じつやら目覚めが近いようだ。

彩「つと、そろそろ時間か。」

フランは未だに抱きついたままだ。
目が覚めるまでこりついているつもりだろう。

彩「それじゃフラン、またな」

そう言つて笑つた。
対してフランは、

フ「うん、今度は一緒に修行しようね」

ニコッと笑い返してきた。

その笑顔を最後に意識が沈んでいった。

夢の中での約束～dream sides～（後書き）

ああ、眠い。
文才が乏しい。

感想・誤字指摘待つてます。

武器を手に入れよう・・・ある？（前書き）

今回はオリキヤラが一人出てきます。
後ほど、詳細設定を投稿します。

それでは、ビギー

武器を手に入れよう・・・あるえ？

side(彩人)

あの悪夢のような宴会から10日が立った。

案の定宴会の翌日は酷い一日酔いに襲われた。

あれは酷かった。立とうとすると天地がひっくり返ったような感覚に襲われまともに立つことができず、頭は万力で締め上げられたようになら痛んだ。

藍が来てくれなかつたら次の日まで続いていたかもしれない。

藍の適切な処置のおかげで夕方ころにはだいぶ楽になつていた。

ルーミアと橙もいろいろ世話をしてくれたから後で「褒美をあげなくちゃな。

余談だがルーミアと橙は宴会で仲良くなつたらしく一人で協力する姿は微笑ましいものだつた。

原因を作つた靈夢と魔理沙だが、最初はしばらく口を訊かないつもりだつた。

でも、すぐに謝つてきたのと本当に反省していくよつだつたので一人の頭を優しく撫でて許した。

しっかりと釘は刺しておいた上でね。

それと修行の方だが、空を飛ぶのはもう大丈夫だ。

それと、飛ぶよりも足に魔力を込めて空中で跳躍した方が弾幕「つこにおいて立ち回りやすいことに気がついた。

弾幕は新たに一枚のスペカを作つた。今はまだ秘密だけどそのうち、ね。

能力は、何ができるのかを把握すべくいろいろ試した結果、

- ・弾幕の軌道は少ししかずらせない。
- ・自然現象はだいたい操れる。（風、水、雷、etc・・・）

・時間操作は今の段階で約数秒
つてところだ。

あと、魔力を使って火を熾したり風を起こしたりもできるようになつた。

10日での成果としてはなかなかだと思つ。

フランとの修行の成果つてのもある。どうやら2～4日のサイクルで能力が発動するらしい。

10日で3回、夢の中に入った。

フランも徐々にコントロールできているようで加減が分かつてきたようだ。

会うたびに抱きついてくるが今では靈力で身体を強化しなくても受け止められる。

フラン曰く、一緒に修行するようになつてからは飛躍的に成果が出ているらしい。

それと、二人で弾幕ゲーリングの練習もしている。
お互いに相手の動きを観察して良い部分を吸収するため立ち回り方がどことなく似てきた。

10日間修行していて、ふと思つた事があつた。

彩「武器がほしいなあ」

団子を作りながらつぶやく。

遠距離戦もいいが、男だったら一度は剣を振るつて見たいと思つものだつ。

彩「やっぱ刀だよな。それも二刀流で」

刀一本を携えて戦う。いいね、絵になるね。

できた団子を串に刺してさらに盛る。

思い立つたが吉田ということで、早速靈夢に相談すべく縁側へと向

かつた。

彩「なあ靈夢、ちょっと相談があるんだけど」

縁側でお茶を飲んでいた靈夢に団子を渡しながら話しかける。

靈「ありがと。で、何よ相談つて?」

靈夢は団子をモフモフと食べながら先を促してきた。

彩「ああ、武器を売つてゐる店があつたら教えてほしいんだけど…。」

?「それならちよつとどこで店を知つてゐるぜ?」

途中で誰かの声に遮られた。その声は上空から聞こえてきて、一人の少女が庭に降り立つた。

彩「あつ、魔理沙。ちよつとよつ」

魔「ちよつとよつだぜ、彩人」

互いに軽い挨拶を交わし、魔理沙は流れゆくような動きで縁側に座り団子を手に取り、口へと運ぶ。

靈「ちよつと、それは私のお団子よー。」

彩「いいじゃないか、おこしいもののは自分で分け合つものだぜ」

「まだね」

セツヒツて魔理沙の頭をわしゃわしゃと撫でる。

魔「わわッ！そ、それでだな武器を売つてゐる店の話だが魔法の森の入り口近くにあるんだぜ」

少し頬が赤くなつたよつた氣もあるが店の話が始まつたので氣にしないことにした。

靈夢はお茶を入れなおしにいつたよつた。

人里ではなく魔法の森の近くにあるひとと自体普通ではないな。

彩「どんな店なんだ？」

普通ではないことに好奇心が沸いてきて魔理沙に聞いてみる。

魔「いろんなガラクタや外の世界の物も扱つてゐる道具屋だぜ」

ガラクタ云々は置いといて、自分の世界の物まで扱つてゐるひとには驚いた。

何か面白わうな事が起るの予感がしてわくわくしてへる。

彩「魔理沙、そこまでの道案内を頼めるか？」

魔「お安い御用だぜ」

そう言って快活に笑う。

魔「じゃあ、早速行くか？」

靈「待ちなさい、私も行くわ」

靈夢が人数分のお茶を持って戻ってきた。

靈「そろそろ茶葉が切れそうだから補充しに行かないといけないのよね」

そう言つてめんどくわうにため息をする。

彩「なら、代わりに買つてこようか?」

靈「いいわよ別に・・・それにタダだし」

後半の方は聞き取れなかつたがどうやら一緒に行くみたいだ。

彩「それじゃ、お茶と団子を空けたら行こつか」

靈夢が淹れてくれたお茶をゅくくりと飲み干した。

お茶を飲んだ後に二人で道具屋なるところまで飛んでいった。
魔法の森には有害な瘴氣というものが発生しており危険なの
だが、力の強い者や魔力を持っている者には影響が無いらしい。
しかも、魔法を使う者にとっては環境がいいらしく魔理沙もここに
住んでいるだつてさ。

あとで、魔法の修行をしに来よつ。

そんなことを考へてゐる間に田的地区に着いた。

彩「うつさんだいへーーーがそつなのか?」

なんといつか、うん、コハ屋敷に見えなくも無いな。
狸の置物だつたり、標識だつたりが置いてあるし。
中はいつたいどうなつてゐるんだが、あまり想像したくないな。
靈夢と魔理沙は一瞥もせずに中に入つていく。
そのあとを追いかけて自分も中に入った。

魔「ーーーん、おじやますねーーー」

靈「お邪魔するわよ、森之助さん

彩「ーんこひはーーー」

靈夢はわかつと奥へと行つてしまつた。

魔理沙は武器を探すためにいろいろ物色している。

?「靈夢、魔理沙、邪魔しに来たのなら帰つてくれ

眼鏡を掛けた銀髪の男性が迷惑そうにため息をついてからひきを向いた。

霖「やあ、君は初めて見る顔だね。僕は森近霖之助。^{もりちからんのすけ}ーーーんとでも呼んでくれ

手を差し出して血口紹介してきたのでーーーもそれに対応する。

彩「はじめまして、俺は狂咲彩人。好きに呼んでくれ

軽く握手をして自己紹介をする。

霖「ようじく、といひで君は外来人かい？」

いきなりだつたので驚いたが服装を見れば分かるらしくそこまで驚かなかつた。

彩「そうだよ、よく分かつたね」

霖「君の服装を見ればね、生地が人里には無い物だから

やはり、文明のレベルが違つちつちい。まあ、どうでもいいけどね。

霖「それで、今日はどうじつた用件だい？」

危つづく本来の目的を忘れるところだつた。

彩「実は刀が一本欲しくて、魔理沙がここにあるつてんで訪ねたんだ」

霖「そうかい、武器はそこにあるので全部だから、あと他の物も自由に見ていいよ。分からぬことは僕に聞いてくれ」

そう言って、椅子に腰掛け本を読み始めた。

魔理沙は何時の間にか居なくなつてゐるし、仕方ない、一人で探すか。

少年物色中・・・

結論から言って微妙だった。

木刀から槍、薙刀、刀、剣、モーニングスターまであつたがやはり自分に合つた物はなかなか見つからず全てダメだった。仕方が無いので、外から流れ着いた物を見ることにした。

彩「なあ、こーりん。外から流れ着いた物ってここいら全部か?」

とある棚を指差し訊いてみる。なんか見覚えのあるものなんかあるな。

霖「そうだけど、武器は見つかったのかい?」

彩「いや、気に入った物は無かったよ。今は気晴らしつて所かな」

苦笑しながら答える。

霖「なら、少し見てもらいたい外の物があるんだけどいいかな?」

彩「分かる範囲でだつたらいいよ」

そう答えるとこーりんは奥へと引っ込みいろいろと抱えて戻ってきた。

霖「僕の能力は、『道具の名前と用途が判る程度の能力』って言ってね、名前と用途は分かるけど使い方までは分からないんだ。それでも用途さえ分かれば大体使えるんだけどね」

そう言つて持つてきた物の中には、ゲームボーイやケータイ電話などの文明の利器もあつた。

一つ一つ、使い方を説明していると奥から茶葉を抱えた靈夢と刀を一本抱えた魔理沙が戻ってきた。

靈「あら、ずいぶんと楽しそうね。武器は見つかったの？」

彩「残念ながら良いのは無かつたよ」

少し残念だが無い物は仕方が無い。

魔「彩人、これはどうだ？なんだか鞘から抜けないんだけど」

そう言つて刀を一本渡してくる。

一つは黒地に風のような物が描かれた鞘、柄は青色だつた。もう一つは同じく黒地に桜の花びらが描かれている。柄は橙色だ。

霖「魔理沙、また勝手に持ち出してきたね。悪いがこれは売り物じゃないんだ。いわくつきの代物なんだよ」

こーりんは頭を抱えながら、説明する。

大変だなこーりんも。少し同情するぜ。

霖「これの最後の持ち主は凶悪な殺人鬼でね、数え切れなくなる人を切つたそุดよ」

こーりんは刀の持ち主について語り始める。

霖「その殺人鬼の刀はいつも血に染まつていたらしくて、すぐに錆びてしまうから数多くの刀を使ったそุดよ。」

霊夢と魔理沙の顔が引きつっている。

そんな奴が持っていた刀には見えないんだけどな。

なんだか、力を感じるし。

霖「そんな時、殺人鬼が死んだつて噂が広まつてね、その殺人鬼の隠れ家にあつたのがこの刀つて訳だ。」

話を聞いた二人の顔は真つ青になつており若干後ずさつている。

魔「あ、あははは、」一りんいくらなんでも脅かし過ぎだぜ」

霊「そ、そうよ。大体そんな刀がこんなところにあるはず無いでしょ」

二人は意地を張つてゐるがビビリまくつてゐるのが丸分かりだ。

霖「その刀が抜けないのは、中で完全に刃が錆びてゐるから、と言われているね。殺人鬼の呪いがあるから封印が掛けられているとも言われる」

視線をこの刀に移す。

「一りんの言つていることはおそらくデマだろ。」

時が経つにつれてそういう噂がひとり歩きしても可笑しくはない。

彩「そんなんじゃないよ、」

だから、言つてやつた。

霖「何が違うんだい？」

彩「この刀を殺人鬼が持っていたって事だよ。おそらく、誰にも触れて欲しくないからそういう噂を流したんじゃないかな？」

魔「ど、どうしてそんなことが言えるんだぜ？」

魔理沙が必死の形相で聞いてくる。

今的话を聞いたらそうなるのも無理は無いけど

彩「まず、この刀から邪悪な気配が感じられない。話の通りのものなら靈夢が気づかない訳ないし、紫がほつとかないだろ？」

二人ともようやく気づいたようで「あつ！」と声をそろえた。

靈「じゃあ、刀が抜けないのはどうこうじよ？」

確かに呪いでも鎧でも封印でもないなら抜けるはずだ。
でも、実際は抜けない。

一つ試してみたいことがあったので「一りんに聞いてみた。

彩「なあ、この刀の名前って何て言うの？」

霖「確か、柄の青い方が春疾はるやみ、橙色が春風はるかぜだったかな。それがどうかしたかい？」

三人とも不思議そうな顔をしている。

彩「いや、名前を呼んだら答えてくれるかなと思って。しかし、春疾と春風か、二つで春疾風はるはやかぜだな」

何気なく言った瞬間、刀が光った。

突然の光にみんな目を塞いだ。しかも手の中から刀が消えた。

光が止み、目を開けるとそこには刀ではなく、二人の少女が立っていた。

一人は艶のある背中くらいまでの黒髪で青い浴衣を着ている。もう一人は茶色い艶のある髪をポニーtailにして、橙色の浴衣を着ている。

二人は姉妹のように似ていて、浴衣の丈が太ももあたりまでしか無くすらつとした足が伸びている。

どちらも靈夢や魔理沙に引けを取らないくらいの美少女だ。あまりの出来事にしばし呆然としていたが沈黙を破ったのはポニテールの少女だ。

? 「ん~つよく寝た~。あなたが起こしてくれたの?」

彩「えつ?いや、えつと・・・」

突然話しかけられ少し戸惑う。

春疾「まずは自己紹介が先よ。はじめまして、貴方が私たちを起こして下さったのですね。私は春疾です。こつちが・・・」

春風「待って、お姉ちゃん。自分で言つよ。春風です。よろしくお願いします。」

どうやら青い浴衣の少女が春疾、橙色の浴衣の少女が春風らしい。といふか・・・

彩「俺は狂咲彩人、よろしくな。ところで、君たちはまさかさつきの刀か?」

全員の疑問を代表して聞いてみた。

春疾「そうです。私たちは一本で一つの名前を言つた者のみが使うことのできる刀なのです」

春風「でも、時が経つにつれて誰も私たちのことを使える人が居なくてなつて、あんな作り話が出来てからは近づこうともしなくなつたんだよね」

春疾「そして、長い年月の中で自我を持ち、この姿で仕える初めての主がご主人様です」

彩「ご主人様？俺が？」

正直、そんな器ではないんだけど。

そこで、やつと硬直の解けた魔理沙が捲くし立てるように春疾に詰め寄つた。

魔「じゃ、じゃあさつきの殺人鬼云々の話は作り話だつたのか？」

春風「誰も私たちの事を抜けないからそういう話が出来たんじゃないかな？」

それを聞いて、魔理沙と靈夢は力が抜けたのかふたりで床にへたり込んだ。

魔「な、なんだよ。やっぱり嘘じゃないか？」

靈「まったく、人騒がせね？」

二人はぐつたりとしている。これは今日の夕飯は俺が作ることになりそうだな。

靈夢と魔理沙は置いといて、話を戻す。

彩「それで、君たちの名前は？」

春風「えつ？ だからはるか・・・」

彩「それは、刀の名前だろ。そうじゃなくて、君たち自身の名前だよ」

二人は戸惑っているようだが、俺個人としては自我を持つたのなら刀だろうが名前が必要だと思う。

春疾「ありません。そもそも、私たちは刀です。名前なんて必要無いと思います」

戸惑いながらも名前の無いことを伝えてくる。

彩「必要無いわけないだろ。名前はそいつが存在する証だ。確かに刀の名前はある、でもそれは刀が存在する証だろ？」

昔、ばあちゃんに名前の大切さについて教えてもらったことがある。同じ字でも名前は一人一人違う意味を持つ。それは、存在する人が一人一人違うからだ。

名前をもらうこと、それはこの世界に生まれた証なんだって、教えてもらった。

だから、名前が無いこの少女たちに名前を着けてあげたい。

彩「だから、俺がお前らに名前を付けてやるよ」

一人の頭を撫でながら穏やかに笑う。

彩「それに俺の刀になるんだつたら、家族も同然だろ?」

二人はポカンとしていたがすぐに破顔し、

春風「家族・・・えへへ、なんかいいね、そういうのーーー

春疾「ご主人様は、面白い方ですねーーー」

照れながらも了承してくれたようだ。

だがまず先にやることがある。

彩「こーりん、売り物じゃないのは分かるけどこの刀、譲つてもらえないか?」

まだこの刀の持ち主はこーりんだ。

どんな条件を出されるか分からぬがこーりのためにも何としても手に入れる。

そう決意した矢先、

霖「いや、それは君に譲るよ」

あつさりと譲つてくれた。

彩「へつ?いいのか?」

あまりにも淡白なので思わず聞き返してしまった。

霖「ああ、それは噂の真偽がはつきりしていなかつたから保管していただけだからね」

それに、と一呼吸置いて、

霖「君には外の世界の話や道具の使い方をいろいろ教えてもらつたしね。正直僕としてはそちらの方が価値が上だよ」

「どうやら、すんなりと手に入れることが出来たようだ。

俺は一人に向き直り、

彩「よし、それじゃ名前を付けるか。実はもう考えてあるんだ」

春疾・春風「お願ひします」

彩「まず、春疾から。姓は刀の名前で、名前は【春一番とともに花を咲かせる姫】っと言つ意味をこめて『咲姫』つて言つのはどうだ?」

咲姫「春疾咲姫……とても素敵な名前ですーーありがと『さくじます!』

彩「次に春風だな。姓は同じく刀の名前を取つて、名前は【春風とともに舞い踊る花】と言つ意味を込めて『舞花』でどうだ?」

舞花「春風舞花……とても可愛い名前だね、ありがと『さくふわ』」

「どうやら、一人とも気に入ってくれたようだ。」

彩「それじゃ、これからよろしくな」

一人に向かつて両手を差し出す。

咲姫「よろしくお願ひします、ご主人様」

舞花「よろしくね、末永く可愛がってくださいね」

舞花が上田遣いでそんなことを言つてきた。田は悪戯っぽく輝いて
いる
だから、舞花を抱き寄せ耳元で

彩「ああ、これからはずつと一緒だよ、舞花」
と囁いた。

瞬間、耳まで真っ赤にしたあと刀に戻つてしまつた。

咲姫「すみません、ご主人様。あの子は、いつもああでして」

咲姫が謝つて来る。

彩「いや、別に気にしてないよ。しかし、初心な奴だな。咲姫もや
つてほしいか?」

咲姫「い、いえ・・・私は別に・・・キヤツー」

咲姫にも舞花と同じよつて耳元で囁く。

彩「咲姫、ちゃんと名前で呼んで」

咲姫も舞花と同じく耳まで真っ赤にして刀に戻ってしまった。

彩「一人とも初心だな～」

そう言うが自分もかなり恥ずかしかったのは秘密だ。

舞花「う～～、彩人様を照れさせようと思つたのに逆にこっちが照れちゃつたよ～～」

咲姫「あまり彩人様を困らせてはだめよ」

二人がティン一ベルくらいのサイズで出てきた。
まだ一人とも顔は赤いけど。

舞花「驚いた？私たちは人型と刀、そして刀のまま自分の意識体を彩人様の周囲に出すことが出来るんだよ～」

咲姫「ちなみに、人型の場合は自分と同じ刀を使うことも出来ます。あと、私と舞花は念話で遠くに居ても意思疎通が出来るんですよ。」

舞花「私たちは、刀だけにそれなりの剣術は使えるから危なくなつたら彩人様を守るね」

そう言つてはにかむ二人が可愛くて、

彩「じゃあ、危なくなつたら期待してるぞ」

自分もはにかんで答えた。

武器を手に入れよう・・・あるえ？（後書き）

オリキヤラの一人は刀の付喪神です。

長い年月の果てに自我を持つて次の持ち主を待っていたのです。

感想・誤字訂正待つてます。

人里と親の役目（前書き）

今回は、人里へ行きます。

果たして、また厄介事に巻き込まれるのか？
ちょっとぴり、シリアスです。

それでは、どうぞー

人里と親の役目

side 彩人

武器を買いに来たはずなのに、刀が女の子になつたり、その女の子に「ご主人様つて呼ばれたり、いろいろあつたがとりあえず目的は達成できた。

自分の愛刀であり新しい家族、春疾咲姫と春風舞花。

この付喪神の姉妹は現在、ティン一ベル位のサイズになつて両肩に座つている。

彩「さて、思いもよらない出会いがあつたけど目的も達成できたらそろそろお暇しますか？」

未だにへたり込んでいる靈夢と魔理沙へそう問い合わせた。

靈「そうね、そろそろ帰りましょうか。ほら魔理沙、しつかりしなさい！」

お互に寄りかかっている状態なので、なかなか立つ事が出来ない。

靈「ああっーもうー！」

痺れを切らした靈夢は魔理沙を突き飛ばしてよつやく立つた様だ。その魔理沙はガラクタの山に突つ込んでいった。

うわっ、痛そーだな。

両肩の一人は両手で顔を覆つている。

そんなことを思いながら魔理沙に近づいて、

彩「お~い、大丈夫か?」

声を掛けてみると、
ガラクタを除けながら魔理沙が出てきた。

魔「いたたた、ひどいぜ靈夢、私が何したって言つんだよ

若干涙目になりながら靈夢に講義する。

靈「あんたがわざと動かないのが悪い」

霖「店の中で暴れるのはやめて欲しいんだけど・・・」

相変わらず靈夢は容赦ないな、こーりんは頭を抑えてため息をついている。

いつもこんな感じなんだろうな、ドンマイだこーりん、わざとそのうち良い事あるつて。

心の中でエールを送る。

つと、それより一人にも紹介しなくちゃな。

彩「靈夢、魔理沙、紹介するよ。俺の守護刀で新しい家族の・・・」

咲姫「春疾咲姫です。よろしくお願ひします」

舞花「春風舞花だよ、よろしくね」

俺のあとに続けて二人が自己紹介をする。

靈「ええ、よろしくね。」

魔「よろしくだぜ」

さつきの話を聞いていたからだろう、すんなりと受け入れられた。

二人の紹介も終わつたし、そろそろ帰るか。

彩「それじゃあこーりん、いろいろ世話になつたな。」

霖「こちうらこそ、有意義な時間だつたよ。また、暇な時にでも来てくれ」

魔「じゃあな」こーりん、また来るぜ」

霖「それじゃ霖之助さん、お茶もひつていくわね」

霖「できれば、密として来てくれ」

こーりんの対応の違いに少し噴出し、自分も一人を追いかけた。すると、入り口近くでこーりんに呼び止められた。

霖「そうだ、人里にはもう行つたかい？」

人里つてその名の通り、人が暮らしている里のことだらう。

そういえば、なんだかんだで行つて無かつたな。

彩「いや、まだ行つたこと無いな」

霖「それなら、帰りにでも寄つてみるといい。ここから神社まで半分くらい行つたところから見えるはずだ」

どうやら、こーりんの話では生活用品などは人里でしかまず買えないそうだ。

いつまでも神社に居候するわけにもいかないし、修行が終われば訪れる機会も増えるだろ？

それによるとの交流は大事だつて、婆ちゃんも言つてたしな。両肩の一人も行きたそうにしているし、ちょっとどういかも知れない。

彩「サンキュー、今から行つてみるよ。いろいろと悪かったな」

いろいろとは、主に靈夢とか魔理沙とかのことだ。

霖「いや、君が気にする」とじゃないよ。悪いのはあの一人だからね。・・・ハア」

こーりんがどこか遠くを見つめてため息をついている。
こーりんのため息をBGMに俺は逃げるようになに店を出た。

魔「遅かったな、何してたんだ？」

どうやら待つてくれてたようで二人は近くの切り株に腰掛けていた。

彩「ちょっと、世間話をね。それより、これから人里に行こうと思うんだけど一人はどうする？」

魔「私は・・・行かないぜ」

魔理沙が俯いて答えた。俯いているため表情は見えない。

靈「私も遠慮しどくわ。特に用も無いし夕飯の支度があるしね。あ

つ、夕飯までには帰つてきなさいよ

どうやら靈夢も行かないようだ。しかし、最後のは久々に聞いた気がするな。もう何年も前に聞いたつきりだつたからな。
最後に聞いたのは何時だったかな・・・？

咲姫「彩人様ー？どうなさつたのですか！？」

彩「えつ？」

どうやら、少しボートとしていたらしい。
心配そうな顔をしている4人が映る。

彩「ああ、大丈夫だよ。少し、昔を思い出してね。・・・靈夢」

靈夢は安堵した様子だつたが名前を呼ばれ、キヨトンとしている。
その様子がなんだか可笑しくて、頬が緩みかけるがそれをなんとか抑え、

彩「必ず夕飯までには帰つてくれるよ。それと、ありがとうね」

何故お礼を言われたのか分からな「どうで、またもやキヨトンとしている靈夢と魔理沙に背を向け、

彩「じゃ、行つてくる」

人里へ向け地を蹴つた。

人里への道中、鼻歌を歌いながら飛んでいると、舞花が口を開いた。

舞花「さつきは、何を思い出していたの？」

さつきとは、ボーッとしていた時の事だろう。

別に言ひづらい事でもないので、ちょっととした昔話をした。

彩「俺にはさ、家族と呼べる存在が婆ちゃんしか居なかつたんだ。両親は俺を置いて、遠い別の国で生活していた」

彩「俺が遊びに行くとき、決まって『夕飯までには帰つてくるのよつて婆ちゃんが言つてくれてたんだ』

二人は黙つて聞いている。

彩「そんな婆ちゃんも去年、寿命で亡くなつた。靈夢が、『夕飯までには帰つて来い』つて言つてくれたのがなんだか嬉しくてね、思わず昔を思い出していたんだよ」

話終えると、両頬に温もりを感じた。
どうやら一人がくつ付いているようだ。

咲姫「今は、私たちが家族です。おばあ様の代わりではなく、私たちなりに彩人様を支えます」

舞花「彩人様は一人じゃないよ、私たちがずっと一緒にいる。だから、そんな寂しそうな顔しないで・・・」

どうやら、知らないうちに顔に出ていたようだ。

いらない心配を掛けちゃつたな。

でも、確かにそうだ。今は二人が居るし、靈夢、魔理沙、紫、藍、
橙、ルーミア、フラン、ニーリンがいる。

何時の間にか俺も人の温もりを求めていたのかも知れない。

俺は独りじゃないんだな。

胸の奥が熱くなつていく感覚が心地いい。

俺は一人を優しく包み込み、お礼を言った。

彩「ありがとう、咲姫、舞花。おかげで元気が出たよ」

二人は照れながらもはにかんだ笑顔を咲かせた。

そんな道中の一コマである。

あれから、しばらく行くと家々が連なつてゐるそれなりに大きな集落を見つけた。

おそらく、ここが人里だらう。

さすがに、飛んで入るのは礼儀的に如何な物かと思ったので里の近くで着地し、歩いて人里まで向かつた。

門を抜けようとしたところで、衛兵っぽい人に何者か聞かれた。

これが俗に言う職質つて奴か？嘘を吐くと後々面倒なので神社から来たことを伝えるとあつさり通してくれたが、なんだか反応が引っかかつた。

畏敬の念というかそんな視線を感じる。

まあ、なにわともあれ人里に着いた。

人里の町並みは時代劇を連想させる造りでさまざまな人の往来がある。中には妖怪もいて店を経営している者もいた。

里なのに町とはこれいかに（笑）

彩「へー、結構賑わっているな、一人も人型になつたらどうだ？」

そう提案すると、一人とも人型に変わつた。腰には刀を差している。

舞花「うわー、いろんな物や人がいるー。あー、あれは何かな？」

そう言つて一人で先に進んでいく舞花。

咲姫「あー、舞花、ちょっと待つてよ」

あわてて後を追う咲姫、しかしその表情は楽しそうだ。
そんな微笑ましい姿に自然と笑みがこぼれる。

付喪神として自我を持つてからこういった経験が無い一人には目に
映るもの全てが新鮮なのだろう。

今日はとことん楽しむ、そう決め一人の後を追つた。

舞花「わー、これ可愛いーねえお姉ちゃん、これ可愛いね」

咲姫「そうね、二つで一つの商品だなんてまるで私たちみたいね」

二人が見ていたのは、髪を梳かす櫛だ。二つでワンセットらしく色
も青色と橙色どがあり、桜の模様が描かれている。

主人「お嬢ちゃんたち良い目をしてるな。それは、像つていう大きな動物の立派な牙を特殊な製法で加工、彩色し当時最高の職人が2年を費やして完成させた代物なんだぜ」

店の主人が自慢げに言つ。

主人「どうだい？安くしておくから彼氏に買つてもらいな」

咲姫「か、彼氏だなんて／／／ 彩人様は私たちの主です／／／」

彼氏と聞いて顔を赤らめる咲姫。

それには動じず舞花が値段を聞く。

舞花「ちなみに、いくらなの？」

主人「嬢ちゃんたちに免じてまけにまけて50円でどうだ？」

紫によれば幻想郷の一円は現代の一万円に相当するそうだ。
話を聞いた限りじゃ間違いなく国宝級の代物が五十万、すげえな幻
想郷。

舞花「うーん、やっぱり高いね。こんなに綺麗なんだもん」

舞花は少し残念そうに櫛を元の場所に置いた。

彩「それを売つてください」

その言葉に、舞花、咲姫、店の主人までもが目を丸くした。

主人「いいのかい？無理して今買つことも無いんだぜ？」

あまりにも予想外だつたのか、売るのを渋つているようにも見える。
きっと、無理している、とても思われてんだろうな。

彩「心配には及ばないですよ」

そつと50円を差し出す。

彩「それに、女を満足させられる甲斐性を持つこそ、男というものでしょ?」

その言葉を聞いた店の主人は、豪快に笑い、背中をバシバシと叩いてきた。

伸「気に入つたぜ、兄ちゃん。俺は伸^フって言つんだ。兄ちゃんの名前は?」

彩「俺は、彩人という者です」

伸「彩人か、良い名だな。ほら、持つてきな」

綺麗な布製の入れ物に入った二つの櫛を渡される。

彩「はい、俺から二人へのプレゼント」

そう言つて、青い櫛を咲姫へ、橙色の櫛を舞花へ渡す。

咲姫「あ、ありがとうございます。でも、ほんとにいいんですか?」

咲姫はまだ戸惑つているようだ。舞花なんてよほど嬉しかったのか、抱きついてきた。

それを優しく受け止め、

彩「いいんだよ。俺が一人と出合つた記念に何か形に残して置きたかったんだ」

と言つと櫛を大事そうに抱え、

咲姫「わかりました、大事にしますね」

とても魅力的な笑顔を咲かせるのだった。

とても綺麗だったので照れくさくなり、それを隠すため次の店へと向かつた。

それからいろんな店を見て回つたり、甘味処で少し休憩したりしていたらあつと/or>いう間に時間が過ぎて夕方になつていた。

彩「よし、そろそろ帰らないと靈夢に怒られちまうな」

靈夢は怒るとすぐに手が出てくるから疲れる。

まあ、甘味で機嫌が直るけどね。

そろそろ、帰ろうとした矢先、人が集まっているのが見えた。

舞花「なんだか人が集まっているね~、どうしたんだろう?」

彩「よし、いつてみるか」

何か面白そなことでもやつているのかと思い、人だかりに向け歩き出した。

人だかりには、屈強そうな男たちが集まつていてその中には伸さんの姿もあつた。

彩「伸さん！この人だかりはなんですか？」

伸「おう、彩人か。いやな、酒屋を営んでいる助六って奴がいるんだがその娘がまだ帰つて来てないらしいんだ。」

伸さんは、少し焦つているようだ。

伸「もうじき日も暮れる。そしたら、妖怪たちの時間だ。捜索が困難になるどころか下手したら俺達まで食われちまうかもしねない」

そこまで聞いて、俺は意識を集中した。

人里周辺の森の中から人の命の流れを読み取ることが出来た。そして、みんなには聞こえないように舞花に指示を出す。

彩「舞花、ここから南西の方角の森に今話で出てきた女の子がいるはずだ。その子を保護してくれ。みんなにはバレないようにな」

舞花は二つ返事で南西の森へ走つていった。

彩「咲姫は、舞花が女の子を保護したら教えてくれ」

咲姫「分かりました」

それを確認した俺は人だかりの中心へ向けて歩を進めた。

中心では、複数の男達と自分と同い年くらいだろうか？少女がなにやら言い争つていて。

と言つよりも、男達が少女になにやら頼んでいたようだつた。

男1「お願いだ先生、俺たちにも探させてくれ」

男2「そうだ、子供が危険な目に遭っているかも知れないのに家で待っているだけなんてできねえ」

男3「子供は命に代えても守るのが親の役目だ、みんなそつだろ?」

他の男達も口々にそつだそつだ、などといつてゐる。
対して少女の方は、

?「しかし、もうじき日も暮れる。夜は妖怪達が活動する時間なのは皆知つていはばずだ!」

男2「それでも、手分けして探せばすぐに見つかるはずだ」
「？」危険すぎる!もう活動している妖怪だつているかもしれないんだぞ!」

と、なんとか落ち着いてもらおうとしている。

しかし、男達は熱した油のよひにヒートアップしていて少女の声は届いていない。

というかこの子、純粹な人間じゃないな。
なるほど、この子が探しに行くのを、『俺たちも連れてつてくれ』つて引き止めているわけか。

で、この子はそんな気持ちを無下に出来ず、こうして留まつているわけか。

優しいな、この子は。それに比べてこいつらはとんだ凡愚だな。
まるで、状況を理解していない。気持ちだけでビックにかなつたら争いなんて起こらないつてのに。
ふつふつと怒りが沸いてくる。
だから、言つてやつた。

彩「馬鹿だな、お前ら」

この一言で場が静まり返った。

あれだけ騒いでいた男達が皆一斉にこちらを見ている。
そして、おそらく件の女の子の父親であるう男、確か助六だつたか
?がこちらを睨み付けながら怒鳴った。

助六「あ?誰が馬鹿だつて?」

その眼光は今にも掴みかかつきそうな勢いである。
しかし、そんなものどこ吹く風のよう受け流す。

彩「ああ、聞こえた?いや、あまりにも馬鹿らしくてつい口が滑つ
た」

いつもの、世間話でもするかのよつて答える。

助六「てめえ、もういつぺん言つてみ!-!-?」

胸倉を掴もうとした手を受け流しその力を利用して地面に叩きつ
る。いわゆる合氣道だ

助六は、背中から思いつき呑きつけられたことで肺の酸素が詰ま
り、浅い呼吸を繰り返している。

彩「なあ、あんただつて分かつているんだろ?」

先生と呼ばれた少女の方を向き、話しかける。

彩「夜は妖怪達の時間だ。早く行かないと手遅れになる。それにな

んの力も無い人間を連れていったつてどうなるかくらこれ」「あ

少女は俯いている。

悔しいのだろう、自分ではこいつらの気持ちを汲み取ることができないのだから。

彩「状況を良く見ろ、妖怪相手に何ができるか、唯口を開けて待っている蛇の口の中に蛙が飛び込むような物じゃねえか」

周囲の男達は唯黙っている。

助六「それでも、親は子供を命を懸けて守るもんだろー？」

ようやく立ち上がった助六が叫んだ。

彩「さあな？俺の親は自分の子供を置いて遠くに行くような奴らだからな。それが普通なのはわかんねえよ。ただな・・・」

助六の胸倉を掴む

彩「命を賭して守った子供を置いて先に死ぬというのがどういうことだか分かって言ってんのか！？置いていかれるって事がどれだけ寂しくて悲しいのか、分かってんのか？」

もつ限界だ。怒りの感情に身を任せた。

彩「親は命を賭けて子供を守る？ そうだな、そのとおりだよ。俺の親が特殊だったってだけで普通はそうだよな。だけどな、自分の器も測れないような奴が偉そうなこと言ってんじゃねえよーーー！」

だんだんと血が目に集まつていいくのが分かる。

彩「何の力も無いお前らが行つたところでなんになる？せいぜいこの子の足を引っ張る程度が関の山だろーが！あんたたちはこの子を苦しめるつもりか？」

助六「そ、そんなわけがあるか！？」

声に力が籠つてない。完全に呑まれている。

彩「いいか？守りながら戦うつてのがどれだけ辛いのか、守れなかつたことがどれだけ辛いのか、お前らには分かるのか？」

ゆっくりと手を離す。助六は地に膝をつき頃垂れている。周囲の男達も、もはやさつきの熱は感じられない。

彩「こうしている間にもあんたの娘は妖怪に襲われているかもな」とどめの一言、助六は声を殺して泣き始めた。

彩「そこで泣いているがいいさ。でも、泣いたつて状況は変わらな
いぞ」

言いたいことは言った。後は・・・

咲姫「彩人様、舞花が無事に保護したそうです」

どうやら、妖怪には襲われてなかつたようだな。
そのことに安堵しつつも氣は緩めない。

彩「分かった。今から合流するからじつかりと護衛するよ」
「言つてくれ」

咲姫「分かりました」

完全に冷え切った人だからを一瞥し南西の森へ急いだ。

舞花「あつー彩人様ー！」

舞花が大手を振つて叫んでいる。その隣には、10歳前後の女の子
がいた。

彩「舞花、お疲れ様」

舞花の頭をなでなでする。舞花はえへへ、と嬉しそうに笑つた。

舞花の隣にいる少女の田線に合わせ話しかける。

彩「こんばんは、俺は彩人。君は助六さんの娘で合つているかな？」

少女がコクンとうなずく。
やはりこの少女で間違いないようだ。

彩「みんな心配しているよ。さ、お家へ帰ろつ？」

そう言って、少女に手を差し出す。

少女は戸惑いながらも小さな手でしつかりと握り返してきた。

人里では、未だに人だかりがあった。あたりはすっかり夜になつていて、その雰囲気はお通夜にも引けを取らないくらいに沈んでいた。まったく、あれから進展してないのかよ。しかも、諦めかけているし。

あまりにも空気が重いがそんなこと知ったことではない。三人を近くで待たせ、助六の元へ向かう。

助六はまだ泣いていた。

彩「なんだ、まだ泣いていたのか？」

話かけるとその場の全員が一いつ斉に向き、先生と呼ばれた少女以外は非難の視線を浴びせてきた。中には罵倒する者もいる。

助六「な、なんだ、俺を笑いに来たのか？」

鼻をすすりながら、非難の視線を浴びせてくる。どうやら、嫌悪と憎悪も混じっている。

やれやれ、嫌われたものだな。

彩「別に、あんたにお届けものがあつてね・・・咲姫、舞花！」

その言葉に、意味が分からぬ顔をしていたがすぐに驚愕の表情になる。

? 「おとつせん…！」

少女が助六の元へと走っていぐ。

助六「え？ あれ？ 七瀬？ 七瀬なの…か？」

助六は困惑している。他の男達や先生と呼ばれた少女も状況が飲み込めず呆然としている。

七瀬「そうだよ、お父さん…！」

笑い泣きしながら助六に抱きつぐ。

助六「あっ、あああ…！…良かつた！本当に良かつた！」

七瀬「お父さん、苦しいよ」

瞬間、歓声が拳がつた。先ほどまでの空氣は一瞬にして消え、歓喜がその場を支配した。

感動の親子の再会に水を差すよつだがこれだけは言つておかなければ、

彩「これは貸しておくよ、後で返してもいいからな。今回は運が良かつたけど、次もどうにかなるなんて思つなよ。それと…」「

一呼吸おき、満面の笑顔で、

彩「大事ならその手を一度と離すな、どんなことがあつても決して離すな」

それだけを言い、人里を後にした。

助六「あ、ありがとうございました!!」

七瀬「助けてくれてありがとうございました。お兄ちゃん、お姉ちゃん……」

背後からは、感謝の言葉と人々の歓声が聞こえた。

その後、博麗神社に帰つたら無数の陰陽玉が飛んできたのは余談である。

人里と親の役目（後書き）

これで、人里の顔出しが終わりました。
次は、妖怪の山にでも行こうかな。

感想・誤字訂正待つてます。

妖怪の山へ行こう！

目の前には、外見的に自分よりも2・3歳年下の少女が夕日を背に仁王立ちしている。

？「彩人よ、無事に帰りたくばこのわしを倒してみせよ

まだ発育途中の胸を張つて尊大な態度をとる少女。
どうしてこうなった？

話は少し前まで遡る。

side～彩人～

人里の一件から3日ほど日が経つた。

朝食を作りながら、今日の修行について考える。

彩「今日も剣術の稽古かな。あれなら、靈力・魔力を総合的に鍛えられるし何より接近戦は能力が使いやすいからな」

靈力で身体を強化しつつ、時折魔力で作つた弾幕を混ぜながら咲姫、あるいは舞花と仕合をする。

二人はかなりの実力を持つていた。始めに二人に仕合をしてもらつたのだが、靈力で強化しないと目で追いきれない速度で斬り合つていた。

正直、この二人に追いつける気がしない。（剣術的な意味で）

二人の指導が良かつたのか、もともと才能があつたのか、3日でかなり形になってきたようだ。

かなり手を抜いていいる状態の二人と切り結ぶくらいまでは上達した。ちなみに、いきなり一刀流は厳しいとの事で基礎である一刀流から始めた。

咲姫を使うときは舞花が、舞花を使うときは咲姫が相手をする。ついでに剣術用スペルも2枚作った。

舞花「彩人様、ご飯炊けたよ~」

咲姫「魚も焼けましたよ~」

彩「じゃあ、ご飯をお椀に盛つて、魚は皿に大根おろしと一緒に装つて」

二人は、「はい」と返事をしてそれぞれ動く。

今は二人に料理を教えている。

二人が自分の料理を初めて食べた時、とても感動したようで料理を教えて欲しいと言つてきた。

別に断る理由も無いので、快く了承しそれから料理を作る際は毎回手伝うこととした。

靈夢も自分の負担が減ると言つことで大賛成だった。
出来た料理を居間へと運び、靈夢を起こしに行く。

全員そろつたところで、いただきます、と合掌し朝食を食べ始めた。

靈「それで、今日はどうするつもりなのよ?」

靈夢が味噌汁を飲みながら訊いてくる。

彩「今日はそうだな、午前中は剣術の稽古、午後は山に出かけようと思つ」

靈「そう、妖怪の山に行くなら天狗には気を付けなさい。あんた達なら大丈夫だろうけど、見つかると面倒よ？」

そう言って、食事に戻った。

彩「そうなのか？わかつた、氣をつけるよ

そんな会話を朝食時にしていた。

午前の修行を終え昼食を食べた俺と姉妹は、妖怪の山の麓まで来ていた。

ここが妖怪の山か、なんだかそれなりに強い妖力を感じる。

咲姫「なにやら、山の中が騒がしいですね。どうします？」

咲姫が言つて、七合田に近いあたりで妖怪たちが騒いでいるようだ。

彩「それじゃ、見つからぬように氣配を消して頂上まで行つてみようか

そう言って、三人は歩き出した。

歩き始めて約一時間、どうにか見つからずに頂上まで来れた。

しかし、道中はなにやら天狗と思われる妖怪が誰かを探しているようだった。

おかげで、結構時間が掛かった。

舞花「うわー、いい眺めだねー。あつ、あれ人里だよー！」

そつ言つて、舞花がはしゃぐ。

確かに山の頂上から見下ろす幻想郷は絶景だった。

緑の絨毯と表現してもいい雄大な自然、その中で必死に生きる動物達。

あの日、夢で見た光景が今は眼下に広がっている。

彩「綺麗だな、すこしく綺麗だ」

思わず、そんなことを呟いた。

?「そうじゃねー！」の景色は幻想郷の中でも上位に入るほど絶景なのじゃ」

俺でも、咲姫達でも無い声が響く。

咲姫達は刀に手をかけ、戦闘態勢をとる。

俺は、構えもせず声の主がいる方を向いた。

?「人間が付喪神とはいえ妖怪を従えて、バタバタしているとはい天狗たちの目を掻い潜り、山の頂上まで登つてこれるとはのう」

そこには、艶のある肩くらいで切り揃えた黒髪が特徴の美少女が木の枝の上に座つていた。

おそらく天狗であろう少女、-背中から立派な翼が生えている-はこちらを見て愉快そうに笑つた。

咲姫が戦闘態勢のまま叫ぶ。

咲姫「あなたは何者ですか？危害を加えるつもりなら容赦はしません」

咲姫と舞花は今にも斬りかかる勢いだ。それを手で制して、二人の前に出る。

彩「いきなり喧嘩腰になつてしまつて悪かつた。俺は、彩人。こつちは咲姫と舞花だ。君は天狗・・・だよな？」

とりあえず、いきなり戦う事になるのは避けたかったので自己紹介と詫びをする。

その態度に少女は目を丸くし、また愉快そうに笑つた後、こちらの質問に答えた。

凪「お主なかなか面白い奴だな。いかにも、私は全ての天狗のトップにして天狗の里の長、天魔の孫娘、涼風凪^{すずかぜなぎ}じや」

その威風堂々とした態度は、なるほど、上に立つものの風格が見え隠れしていた。

彩「凪か、いい名前だな。それで？俺達に何か用かな？」

名前を褒められたことがうれしかったのかフフンと自慢げに笑う。

凪「いや何、ここで日ごろのストレスを発散していたところに付喪神を従えた人間が来たものだからな、つい話しかけてしまつたのじや」

どうやら、敵意は無いようだ。一人も戦闘態勢を解除する。

彩「そうなのか。ここであつたのも何かの縁だし、一緒にお茶でもどうだ？」

そういうながら、外から持つてきのシートを広げ作つてきた団子とお茶を用意する。

凪はますます愉快げに笑い、下に降りてきた。

凪「本当にお主は面白い奴じゃな、せつかくじやし頂こつかの」

「うして、人間と付喪神と天狗のお茶会が始まつた。

そのころ、天狗の里では・・・

天狗1「凪様は見つかつたかつ！？」

天狗2「どこにもいませんっ！…もしかしたら、里にはすでにないのでは？」

天狗3「ええええい！…いつたいどこに行つてしまわれたのか？」

凪が居なくなつたことで上層部の天狗は焦り、大規模な捜索が行われていた。

とばつちりを受けたのは、哨戒任務を主とする白狼天狗と機動力に優れる鴉天狗たちである。

？「まつたく、凪様も「ひの上司たちも困つたものですね~。とばかりを受けるのはこっちなのに」

そう文句を言つのは、黒い翼を持つ鴉天狗の少女だ。

？「まつたくですね、凪様も「少し自重して欲しいです」

それに同意するのは白い狼の耳と尻尾を持つ白狼天狗の少女。二人は同時にため息を吐き、凪の搜索を開始する。

？「仕方ないです、さつさと見つけて取材に戻りますか。行きますよ桺」

そつ言つて空へと飛び立つ鴉天狗の少女。

桺「あ、待つてくださいよ~。文様~」

桺と呼ばれた白狼天狗の少女はあわてて後を追いかける。

そんなことは露知らず、4人はお茶を啜りながら、雑談をしたり凪の愚痴を聞いたりしていた。

凪「それでな、大天狗は酷いんじや。何かにつけて『あなたはこの里の長となるのだから……』とか言つんじやよ~」

彩「うんうん、それは大変だね」

じりやらひの少女、日々の窮屈な日常に嫌気が差し、時折脱走してはここに来ているらしい。

は、お父さんは魔術は魔術でも詰が通じるよ」と、ある程度のことは目を瞑つているらしいがそれは大天狗の責任になるため彼らは気が気でない。

「分かつてくれるかつ！お主はいい奴じやの」

そう言いながら、肩を組んでくる。

匂に因子を一口食べ 役を緑にせた

「しかし、」の団子はつまごの、本当にお主が作つたのか？」

どうやら、気に入ってくれたらしい。
やっぱり、喜んで食べてもらえたと作ったほうとしては嬉しいものだ。

彩「たくさん作つたから、お土産に持つていいくか?」

厭「ぜひ頼む」

そんな話をしていると咲姫が棘のある声で、

咲姫「ちょっと凧、彩人様にくつつき過ぎよ！」

と言つてきた。

凪「む？別に良いではないか。何か問題でもあるのか？」

それに舞花が、

舞花「アハハ、お姉ちゃん焼きもち妬いてる～」

咲姫「なつつ～？／＼／＼」

咲姫の顔が赤く染まる。

凪「お主は随分好かれておるよ、じゅうじゅうの～」

凪が「じゅうじゅうを悪戯つ子のよつた田で見てくれる。

彩「そりや、家族だし。じゅうじゅうが嫌がる様な事をする趣味は無いから当然だろ？」

何をこいつは当たり前のことを言つてこらんだ？

その反応が面白く無かつたのか、若干不満げに、

凪「つまらん反応じやの～、わしは咲姫のよつた反応を期待してたんじゅうが」

ぶー、とでも聞こえてきそうな感じで頬を膨らます。

そんな事言つても事実だしな～。

楽しい時間はあつといつ間に過ぎ、太陽は西に傾いていた。

彩「やで、こい時間だし、そろそろ帰るか」

早く帰つて夕飯の仕度をしないと靈夢に怒られる。

凪「ぬ？ もう帰るのか？ まだいいではないか」

凪が上田遣いで引き止めてくる。

正直、グッときるがまだ死にたくないのやんわりと断る。

彩「いや、家の家主が恐いから今日は帰るよ。凪もじこちやんとか心配してると思つから早く帰つたほうがいいよ」

できるだけ相手の機嫌を損ねないよう説得する。

凪「それはそうじやが、わしづまだお主と一緒に歸たいんじや」

多分深い意味は無いよね、そうだと信じたい。

ああ、後の咲姫と舞花から黒いオーラが出てこるような気がする。

彩「また、遊びに来るからや。今日のことを歸れ、な？」

凪は俯いている。

俯いたまま凪がとんでもないことを言つだした。

凪「なひま、わしが勝つたら一緒に歸つてくれるな？」

は？ どうしてうつむいて話になつた？

・

・

・

そして冒頭に戻る。

凪「ルールはどちらか一方が被弾したら負け、簡単じゃね？」

凪「わあ、ジーフからでも掛かって来るがいい」

自信満々に仁王立ちしている凪。

彩「いやいや、なんで戦つ話になつていいんだよ」

まつたく訳がわからない。

頭を抱えていると、凪が当然だ、とでも言つよつし、

凪「簡単なことじや、わしはお主と一緒に居たい、お主達は帰りたい。どちらも引かないならば、これはもう戦つて敗者が勝者の言う事を聞く方が手つ取り早いし、両方納得できる」

なるほど、一理あるな。

その理由に納得していると、涙れを切らした凪が、

凪「こないのならば」ちらから行くぞ……」

弾幕を展開してきた。しかも、一つ一つが早い。

彩「しあうがないな、咲姫！舞花！」

俺が呼ぶと、両手に刀が出現した。

迫りくる弾幕を最小限の動きで避け、或いは斬り伏せる。

二刀流で戦うのは初めてだが、やるしかない。

凪「なかなかやりあるな、ならこれはどうじゅ？』

そつ言つて懷からスペ力を取り出す。

凪『風刺』『風針連華』』

凪を中心に4つの花が現れる。

目を凝らすと、無数の針状の弾幕で花の形を作つており、一本一本が竜巻を纏つている。

それが自分目掛けて射出される。

竜巻を纏つているため、いわゆるジャイロ回転になつてるので速度と貫通力が桁違いに上がつて、岩なんかやすやすと貫いて来る。あんなのまともに食らえれば蜂の巣確定だらう。なのでこちらもスペルを唱える。

彩『月花』『月明かりの道標』』

これはルーミアと一緒に作つたスペルで、俺の能力を利用して弾幕の流れを読み、安全地帯を一瞬で割り出す回避重視のスペルだ。自分が通つた後は弾幕が出現して相手に向かつて飛んでいく。攻撃も忘れてないよ。

避けきられたのが意外だったのか少々驚いている。

凪『けつこう本気のスペルだつたんじゃが、掠りもしないのはちとショックだの〜』

そう言いながらも顔は楽しそうに笑つていて。

こちらとしては、あまり時間が無いので一気にケリをつける。

凪「ではでは、お次はこれじゃ」

そう言つてスペルを唱えようとしたところを遮つて、

彩「悪いが急いでいるんでね、次は無い！」

スペルを同時に2枚発動させる。

彩「流星』スターダスト・レイン』、狂咲『桜花爛漫』」

凪の周囲に無数の桜の花びらが展開し動きを止め、空から星が降つてきて凪に次々と襲い掛かる。

今回はピンポイントで発動させたため範囲は凪の半径2メートル程度だ。

もちろん、攻撃力は極限まで下げた。多分、で『ピンくら』の威力だろう。

凪「はつ？えつ？きやああああああああああああああ！」

次々と被弾していく。

威力を下げておいたから靈力も魔力も減つてないけど、2枚同時使用は疲れるな。

スペルが終了し、凪の姿が見えた。

彩「俺の勝ちだな？」

凪のところまで近づき確認する。

凪「あんな反則気味のスペルを2枚同時に使うなんて・・・彩人は

意地悪じやな

少し涙目になりながら拗ねた風に凪が言ひ。

確かに、周囲は桜の花びらで上から星が降つてくれればまづ逃げ道は無い。

魔理沙のマスタースパークと同じ位の火力が無いとまず回避できないだろ？

普通に一枚同時に使つたら、靈力・魔力不足で倒れるだろ？

俺は凪の頭を撫でながら、

彩「また、遊びに来るから。今度は、団子の他にもおいしい物を作つてきてあげるからわ・・・」

それじゃダメかな？」と凪に問いかけた。

凪「わしは負けたんじや、今更止めはせん。じやがな、約束じやぞ。必ずまた遊びに来るんじやぞ。団子とかも忘れるな！」

しぶしぶだが、帰らせてくれるようだ。

これは、約束を守らなかつたら後が恐いな。
そんな事を思いながら帰路に立つ。

彩「それじゃ、またな凪」

大きく手を振つて博麗神社に向けて飛んだ。

その途中・・・

彩「なあ、何で一人とも腕を絡ませてくるんだ？飛びづらいんだけど」

何故か一人は、俺の腕に自分の腕を絡ませて胸を押し付けるように抱きついてくる。

意外とあるんだな・・・。

そう思つてしまつのは悲しい男の性か。

咲姫「何でもないです」

舞花「何でもないよ」

理由を聞いてもはぐらかされてしまい、結局神社に着くまで一人は腕を絡ませたままだつた。

side～廻～

不思議な人間だつた。
そして面白い。

妖怪、それも天魔の孫娘と聞いても態度が変わらず、まるで友達に話しかけるような気軽さで自分と接した人間。

まさか、お茶に誘われるとは思わなかつた。

初対面の妖怪をお茶に誘つなんて、つぐづく面白い。

しかし、せつかくの誘いなので、馳走になつた。

中でもあの団子は絶品だつたな。

団子は、柔らかくも独特的の弾力があり、ほのかに甘い。

その上品な甘さを損なわないよう味付けされた醤油だれ。

お土産にと、20本程もらつたので後でお爺様にも差し上げよう。

それに奴と話していると不思議と心が落ち着いた。

なんというか、安心できるといつが、和むといつが、多分どっちも

だろう。

今思えば、この時から奴、彩人に惹かれていたのかも知れない。通りで、あの姉妹からの視線が厳しかつた訳だ。

「クスクス、次会うときが楽しみじゃ」

思わず、顔がにやける。

今の顔を大天狗が見たらきっとお小言が始まらう。

？「やつと見つけましたよ、探すこつちの身にもなつてください」

鴉天狗の少女が空から降りてくる。

「む？文か。それならば、わしの待遇改善を大天狗に要求してくれ

文と呼ばれた少女はため息を吐きながら、

文「大いなる権力の前に私が何を出来るつて言つんですか？」

至極まつとうな事を言つ。

？「はあ、はあ、やつと追いついた」

今度は狼の耳と尻尾がついている少女が降りてきた。

凧「おお、桺も一緒だつたんじやな」

何とか息を整えた桺は文句を言つてきた。

桺「まったく探すこつちの身にもなつてへださい。いつも、とばつちりを受けるのは私たちなんですから～」

と、若干涙目になつてゐる。

凧「すまん、すまん。ほら、これをやるから機嫌を直してはくれぬか？」

そう言つて、彩人特製の団子を一人に手渡す。
しかし、団子を訝しげに見つめるだけで、口をつけようとほしない。

文「この団子、どうしたんですか？」

どうやら何故団子を持つてゐるかが気になつたらしく。

凧「いやな、頂上まで登つてきた人間と付喪神にお茶に誘われてな
お土産にもらつたのじや」

それを聞いて、二人は目を丸くして驚いた。

桺「えつ？ いつ侵入されてたんだろ？」

文「天魔の孫娘と普通にお茶ができる人間・・・これは、スクープ

の予感ですね！」

しかし、反応は正反対で桜は焦り、文は目を爛々と光らせてくる。

嵐「とにかく、食べてみるのじゃ。絶品じゃが！」

一人はそれぞれ団子を口に入れると顔が綻んだ。

嵐「どうじや？ 美味いじゃろ？」

桜「おいしいです！ 今日の疲れなんて吹っ飛んじゃいました！」

桜は千切れんばかりに尻尾を振っている。

文「確かに、これほどのお団子は始めて食べました」

文も驚いていたようだ。

その反応に満足し、

嵐「や、そろそろ帰るかの。文、桜、いつまでも余韻に浸つていな
いで帰るんじや」

一人を置いて空へと舞い上がる。

文「あつー！ 待つてくださいよー」

桜「置いてかないで下さーーー」

一人はあわてて追いかける。

凪「（次はいつ会えるかの〜）」

少女は、興奮を抑えられない子供のよつに空を翔けて帰つていった。

妖怪の山へ行ひやー！（後書き）

感想・誤字訂正待っています。

子供と歴史と少女達の雑談（前書き）

ついで、10000円を超えました。これも皆のおかげです。
どうか、これからもよろしくおねがいします。

それでは、バイ

子供と歴史と少女達の雑談

若々しい青葉に日差しが降り注ぎ朝露が光輝いている。そんな清々しい朝、博麗神社の境内に金属音が鳴り響く。

彩「ハツ！」

キン、と音を立てて刀と刀がぶつかり合つ。

舞花「いい感じだね、ちゃんと剣圧が伝わってくるよ

いつもより早く目が覚めた彩人は、特にすることも無いので朝稽古に勤しんでいた。

いつもと時間が違うだけなのに、周りの自然も朝の空気もどこか新鮮で稽古もまたいつもとは違う感じがする。

偶にはこういうのもいいかな、などと考えていると、

舞花「スキありつ！」

舞花の剣撃を捌ききれず、刀が弾き飛ばされてしまった。

弾き飛ばされた刀が地面に落ちる瞬間、少女の姿に変わっこりひっくり返り寄つてくる。

舞花「もづづづづづ！ 彩人様、余計な事考えてたでしょ？」

舞花が膨れつ面になりながら詰め寄つてくる。

彩「あ、バレた？」

“どうやら、先ほどの事を考えていたのが剣筋に出でいたらしい。

舞花「当たり前だよ！彩人様に剣術を教えているのは私たちなんだよ？」

どうやら、機嫌を損ねてしまったようだ。

とりあえず、舞花の頭を撫でながら謝つとく。
彩人「ごめんね、偶には早朝に稽古をするのも悪くないって思つてやる」

舞花は気持ちよさそうに手を細める。

舞花「まあ、いいよ。彩人様は思つた以上に上達が速いから」

そりやそりや、2～4日に一度とはいえ、フランを相手に弾幕ごっこだの能力の練習だのやつしているからな。
もちろん、弾幕ごっこでは刀を使つている。夢の中だし何でもありだし。

最近は、お互いに大分力の使い方が分かつてきて、今では全力で弾幕ごっこをしている。

最初は力任せだったフランも緩急を付けたりといろいろ考えている。
俺自身、最初のうちは能力を使って避けるだけで精一杯だったが今では互角に戦える。

夢の中なら周りを気にする必要もないし、何より全力を出し合つことで能力にも磨きがかかる。
つい最近気づいたが、靈力や魔力は限界まで使うほど、その上限が上がるらしい。

しかも、夢で全力を出し切ると、少しだが確實に靈力・魔力の上限が増えていた

おかげで、総容量が靈夢と同じくらいになった。

咲姫「一段落着きましたし、そろそろ朝食の準備をしませんか？」

咲姫がそう提案してくる。

確かに、そろそろいい時間だな。

彩「よし、それじゃ朝食を作るか」

二人を連れて、台所へ向かった。

朝食を食べ終えた俺たちは、幻想郷の地理を把握するために散歩へ出かけた。

照りつける太陽の光を能力で調節して、澄み切った空を飛んで行く。
一応お昼には一旦戻る予定だが、さて、どこに行こう？

咲姫と舞花はちっちゃいサイズになつて肩に座っている。

彩「とりあえず、人里に行つてみるか」

人が多いところに行けば何か面白い情報があるかも知れない。
それにまだ見て回つて無い部分もあるし。

そう思い立ち、人里へ向けて飛んだ。

少年・付喪神移動中・・・

彩「よつと、到着~」

人里は相変わらず賑わっているようだった。

まだ朝方と言う事もあって、いろんな人がせわなく動いている。

そんな中、伸さんの姿を見つけたので挨拶に行つた。

彩「伸さん、おはよ~」
「

咲姫・舞花「おはよ~」
「

咲姫と舞花も人型になり挨拶をする。

伸「おう、彩人に嬢ちゃん、おはよ~」
「

伸さんは作業の手を止め、一いち方に近づいてきた。

彩「みんな忙しそうですね、いつもこんな感じなんですか?」
「

伸「おおよ、この季節は口が長いからな。朝早く起きて、仕事しに行くんだ。それよりも・・・」

いきなり肩をつかんだと思つたら豪快に笑い、

伸「いやー、やっぱり俺の目に狂いはなかつたわ

肩をバシバシ叩いてくる。正直痛い・・・。

彩「は?ええと、何のことですか?」

訳がわからないので取り敢えず理由を聞いてみると、

伸「とほけんじやねえよ。人里の男どもを落ち着かせ、尚且つ、助六ん所の嬢ちゃんを助けたじやねえか」

ああ、あの時の事か。別にあれは、子供は最初から助ける気だつたけど、あいつらの行動に腹が立つたから勝手にやつただけで深い意味は無い。

伸「あのあと、お前の評価はつなぎ上りでなあ、いやー、正直やる男だとは思ったが予想以上だつたな」

どつやら、嫌われずに済んだらしい。あれだけ派手にやつたからどうなるかと思ったが杞憂だつたようだ。

彩「そうなんですか。ところで、この人里で面白やつなどこなとか無いですかね？」

話が終わつたようなので情報収集に入る。

伸「面白いかは分からないが、慧音先生がやつてている寺子屋と後は、人里で一番大きな屋敷に住んでおられる稗田様が幻想郷縁起つて歴史を書き残しているな。今は九代目だつたか？・・・悪い、これくらしか思いつかねえ」

そつと、頭を下げる。

彩「いえいえ、十分ですよ。では、そちらに向つてみます

伸さんに別れを告げ、歩きだす。

さて、まずは寺子屋に行って見ようかな。

確か現代で言う学校だったよな。

少年・付喪神移動中・・・

「うやうやしく休み時間になつたので子供たちが元気に走り回つてゐる。

そのうちの一人の女の子がこちらに気づき近寄つてきた。

？「やつぱり！あの時私を助けてくれたお兄ちゃんとお姉ちゃんだ！」

そう言いながら抱きついてくる。確かこの子は・・・、

舞花「確か、七瀬ちゃん・・・だつたっけ？」

七瀬「そうだよ、覚えててくれたんだね」

今度は、舞花と咲姫に抱きつぐ。

他の子供たちもわらわらと集まつてきただ。

七瀬「ねえねえ、一緒に遊ぼ？」

べつに、急ぎの用事も無いので「承しようとしたが、

？「すまない、ちょっとといいかな？」

後ろから声を掛けられた。

そこには、あの時先生と呼ばれていた少女が立つていた。

なるほど、こここの先生だったのか。

しかし、あの時は暗くてよく分からなかつたが、青みがかつた白髪に端正な顔立ち、メリハリのあるスタイルに頭には前衛的な帽子を被つている。

若干、幼さが見え隠れしているがそれでもかなりの美少女だ。幻想郷には美人しか居ないのか？ そんなことを思つていると、

？「先生はこの人達と少し話があるから戻つてくるまで自習しててくれ」

そう言つと、子供たちは蜘蛛の子のよつに散らばつていく。

七瀬「残念だけど、また今度遊ぼうね。お兄ちゃん、お姉ちゃん！」

そう言つて、七瀬も戻つていく。

？「いいで、立ち話もなんだし、上がつてくれ

そう言つて、寺子屋の一室に案内された。

先ほどの少女が、お茶を入れて戻つてくる。

自分達の正面に座り、凜とした声でしゃべりだした。

慧「さて、まずは自己紹介をしよう。私は上白沢慧音、この寺子屋で教師をしている」

彩「俺は狂咲彩人、博麗神社で修行中の外来人だ。こつちは俺の愛刀の付喪神で俺の家族、名前は咲姫に舞花だ」

俺の挨拶に合わせ、一人は軽く会釈をする。

慧「彩人に咲姫と舞花だな、よろしく。しかし外来人か、なるほど、始めて見るがどおりでこちらじゃ見かけない服装をしているわけだ」

慧音が一人納得しこちらをまじまじと見てくる。
なんだか居心地悪いな。

彩「それで、話というのはなんですか？」

話が進みそうに無いのとこいつ恥ずかしいのでこちらから切り出した。
慧音は咳払いをし、いきなり頭を下げ謝罪と感謝をしてきた。若干、
頬が赤い気がする。

慧「そうだったな。彩人、咲姫に舞花、面倒をかけてすまなかつた。
それと、皆を守ってくれてありがとう」

おそらく、七瀬を助けた時の事を言つてているのだろう。

正直、自分としては子供が死ぬと聞かされて、放つて置くほど人間
捨ててないし 最近、人間離れしてきたけど あの馬鹿どもに關し
ては、腹が立つたから言いたい事を言つただけだし、それが結果と
して守つたつて事になつたんだろうけど。

彩「別に、七瀬の件は確かに助ける氣でやつたけど、助六達の事に
関しては結果的にそくなつただけだよ。どちらも俺が勝手にやつた
事だ」

だから、感謝する必要は無い、そう伝えたのだが、

慧「それでも、あのままじゃ皆森に突つ込んで行つただろうし、私

では止めることは難しそうだつた。七瀬も無事だつたかは分からぬ
い、だから・・・」「

ありがとうございました、と年相応だがとても綺麗な笑顔を見せてくれた。

おそれく何かお祓をするまでには引かなければ、そぞろに霧因気だ。

たから
こんな笑顔が見れたのだから
学園の華麗としては十分だ

采
それじゃ、慧音のやの絶
でおしまい。それでいいな?」「

多少強引だが、この子はかなり義理堅い性格のようだし、少しだけ納得しないと納得しないだろう。

慧「なつこー！何を言つてゐるんだ、お前は！／＼／＼」

彩「慧音だつて、皆が笑つていらるるように嘘の事守つているんじやないの？」

その言葉に慧音は押し黙る。何か言いたそうにしているが、かまわ
ず続ける。

彩「今回の事で、七瀬も慧音も不特定多数の人も無事だつた事を喜んで、今を生きている。俺としてはそれで十分なんだよ。慧音は違

卷之三

慧音は力強く言った。

彩「人一人ができる事なんてたかが知れてる、今回は慧音一人じゃ手に負えなかつた。だから、代わりじゃないけど俺達があの子を助けた。それだけのことなんだよ」

慧音もどつやら納得したようだ。

それと、一つ約束をさせる。

彩「慧音、これからは一人で全部背負おうとするな。慧音が傷ついて喜ぶ奴なんてここには居ないからな。どうしても、一人じゃ無理だと思うなら、俺達を頼れ。お前が守りたいものくらいお前」と守つてやるよ」

そう言つて、さわやかに笑つてやつた。

それを聞いた慧音は顔を赤くしながらも、控えめに頷いた。

彩「それじゃ、そろそろお暇するわ」

冷めたお茶を一気に煽り立ち上がる。

それに合わせるように咲姫と舞花も立ち上がる。

慧「もう行くのか？いろいろと話をしたかったんだが」

慧音は少し残念そうに言つ。

彩「いや、授業しないといけないだろ？」

慧「あつー」

どつやら、忘れていたらしい。

子供たちが騒いでいる声が聞こえてくる。

彩「また今度、授業が無い日にでも、な？」

慧「わかつた、また今度だな」

そういう残し、慧音は教室へ、俺達は稗田の屋敷に向かった。

稗田の屋敷は、里で一番大きいとの事だったのですぐに見つけることが出来た。

途中で手土産を買っていくのも忘れない。

規模、装飾、建築美、全てにおいて他の家の追随を許さない造りは、なるほど、九代も続いているにふさわしい景観だった。

彩「でつかいな~」

舞姫「おおきいですね~」

咲姫「おおきいですね~」

三人そろって同じ感想を口にする。それだけ、大きいのだ。
屋敷の門にいる門番に当主に会いたい、と言つと意外にもあっさり中へ通してくれた。

外見もすごかつたが中もすごかつた。

特に庭なんかどこぞの高級料亭も顔負けの造りだった。
ある部屋の前で使用人が止まる。

どうやらここが当主様の部屋のようだ。

使用人が声をかける。すると・・・

？「入りなさい」

声を聞いたとき、驚いた。

その声は女性で、自分よりも年下のようだからだ。

使用人に中へ案内され、おそらく当主であろう やはり見た目は自分よりも幼い少女だ。の目の前に座る。

使用人は出て行き、襖が閉められたと同時に少女が口を開く。

阿「ようこそいらっしゃいました。私は稗田家九代目当主、稗田阿求と申します。」

阿求と名乗った少女は外見からは考えられないくらい大人びていた。その一拳手一投足がとても優雅だ。なんというか華がある。

彩「俺は狂咲彩人、博麗神社で修行中の外来人だ。こつちは俺の愛刀の付喪神で俺の家族、名前は咲姫に舞花だ。今日は、幻想郷縁起を書いているつて聞いたものでね、それを出来れば見せてもらいたくて訪ねた次第だ」

その言葉に阿求はうれしそうに笑みを浮かべ、

阿「お安い御用ですよ、一番最近の物でよろしいですか？」

彩「ああ、かまいませんよ」

少女はクスッと笑い、

阿「別に畏まらなくともいいですよ。私も少し碎けますから」

と言つても、あまり変わらないように見えるが、せつかくなのでお言葉に甘える。

阿求は使用人に指示を『えると、『あらに話しかけてきた。

阿「それですね、お願ひがあるのでですが・・・」

どうやら、俺達の事は結構噂になつてゐるらしく、阿求が、俺達が来たら通すように門番に指示を出していたらしい。

だから、あんなにあつさりと通してくれたのか。

それで、人里の女の子を救つた俺達を幻想郷縁起に乗せたいのでいろいろ話を聞きたいそうだ。

別に、不都合もないし、俺が幻想郷縁起を呼んでいる間に咲姫と舞花が話をするという事に決まった。

たまに俺も補足程度に会話に参加するけどね。

少年読書中・・・

少女達おしゃべり中・・・

幻想郷縁起とは、どうやら厳密には危険な妖怪への対処の方法が書かれたものらしく、妖怪の山などは近づかない方が良いと書かれていた。その他にも歴史とか。

阿求達は、この間にかなり仲良くなつたらしく今はきやいきやいとおしゃべりしている。

さて、そろそろお昼時だし、神社に帰りますか。
そつちもひと段落したようだし。

彩「それじゃ、そろそろ帰るよ。それと、なかなか面白かったよ

やつね礼を言ひ。

阿「ありがとうございます、そう言ひていただけると書いた方としてもうれしいです」

阿求は咲姫達と仲良くなつたためか、かなりくだけた風に笑う。漫画、だつたら、にょまーと言つ擬音語が書いているだろう。

阿「またいつでもいらしてくださいね。歓迎しますから」

咲姫「やつね」

舞花「またね」

阿求と別れ、昼食を摂るために博麗神社へと向かった。

子供と歴史と少女達の雑談（後書き）

次回の投稿は来年の一月三日以降になると思っています。

今年はこれで最後の投稿です。

皆様、良いお年を。

太陽の花そして愛しいモノ（前書き）

今回は前回の続きです。

それでは、どうぞ

太陽の花そして愛しいモノ

side 彩人

靈夢と一緒に昼食を摂った後、ある場所を探しに散歩へ出かけた。午前中に見せてもらった幻想郷縁起に書いてあつた場所を目指して空中散歩を楽しんでいる最中だ。

人里を除けばあとはほとんど森、あつちに居た時は人工物に囲まれていたためよりいつそう綺麗に見える。

そういえば、あいつは元気でやつているだろつか。

もう会えないかも知れない彼女のことと思いながら飛んでいると縁の中に一箇所だけ黄色で埋め尽くされている場所が見えてきた。

そこが今回の目的地、確か太陽の畠という名前だつたはずだ。なにか、注意事項が書いてあつたような気がするが思い出せないので気にならない。

その場所に降り立ち、俺は声が出なかつた。

そこには、あつちの世界ではまず見る事が出来ないほどにたくさんの向日葵が咲いていた。

それも、一輪一輪がとても力強く美しい。

まさしく、太陽の花にふさわしい姿であたり一面に咲き誇つていた。

彩「・・・すつづげえ」

咲姫「・・・綺麗」

舞花「・・・わあ」

それしか声が出なかつた。

あまりにも美しくてしばらく三人でこの景色に見惚れていた。

だからだろう、こちらを狩る者の目で見ている少女に気づけなかつたのは・・・

？「気に入ってくれたかしら？」

不意に声を掛けられ、弾かれたように咲姫と舞花は人型になり戦闘態勢をとる。

それを苦笑しながら手で制し、声を掛けられた方を向く。

二人は警戒こそしてるもの、構えを解いた。

振り向くと、そこには深い緑色のクセが強い髪、白いブラウスと赤いチェックのスカートを身につけた女性が日傘を差して優雅に微笑んでいた。

彩「はじめまして、俺は彩人。こつちは咲姫と舞花。」

とりあえず、自己紹介をしておく。咲姫と舞花も軽く会釈をする。

？「あら、これはこ丁寧に。私は風見幽香よ」

彼女も自己紹介に応じてきた。

どうやら、話が通じない相手じゃなさそうだ。

彩「ここの向日葵は綺麗だな、すこく気に入ったよ。幽香が手入れをしているの？」

幽香「そうよ、この子達は私の大事な家族だもの。私の【花を操る程度の能力】で操つて元気な状態を保つているの」

幽香はうれしそうに笑いながら向日葵たちの方を向いた。その顔は

愛しいものを見るかのよつたな表情だ。

思わず、笑みがこぼれる。

唐突に笑つたからだらつ、幽香が怪訝そつぱんちらを見ている。

彩「いや、どうして」の向日葵が綺麗なのか、少しだけ分かつた
気がしてね」

幽香「へえ、聞いてもいにかしら?」

彩「幽香が」の向日葵に注いだ愛情の分だけ、美しく咲くんだと、
そう思つよ」

その言葉に少しだけ目を開き、それからわつわよつもつねしそうに
笑い、

幽香「ありがと」

一言だけ、お礼を言つた。

それからは特に話す事も無く、向日葵達を観賞していた。相変わらず、一人は警戒していたが。

30分くらいそうしていただらつか・・・そろそろ散歩の続きをしよつと幽香に声を掛ける。

彩「それじゃ、そろそろお暇するよ」

そつぱんして、背中を向け飛ばつとしたが・・・

幽「あら、もう行くの?もう少しいらっしゃらない

と言つて引き止められた。

彩「俺は最近、幻想郷に来たばかりでね。こここの地理を把握してお
くために散歩の続きをしたいんだ。また今度じゃダメかな？」

なるべく、やんわりと断る。だが・・・

幽香「ダメね」

言葉と同時に異常なほどの殺気が放たれる。

それと同時に幻想郷縁起での注意事項を思い出した。

太陽の畠に居る妖怪、風見幽香。

幻想郷最古参の大妖怪であり、能力【花を操る程度の能力】はそれ
ほど強くも無いが、妖力と身体能力が並外れて高く、戦闘における
センスは天性のものを持っている。

花を愛するがゆえに花を襲うにする輩は命が無いに等しい。
基本的に太陽の畠に近づかなければ害は無く、人里にも偶に現れる
が機嫌を損ねなければ紳士的ではあるが、近づかない方が吉。
とか書いてあつた気がする

咲姫と舞花は、相手に呑まれたのか足が震えているも、俺を庇うよ
うに立つ。

その姿がとても愛しくて、心が温かくなる。

俺は一人の肩に手を置き、

彩「二人とも、無理すんな。ここには俺に任せろ」

優しく、諭すように声を掛ける。

二人は悔しそうな顔をして、刀の姿になつた。
何故、幽香の殺気を受けても平氣でいられるかというと、フランと
全力で弾幕ごっこしていたおかげである。

全力なので、互いに自然と殺氣立つてくる。しかも吸血鬼が相手だ。その殺氣は幽香と同等かそれ以上だ。

最初はホントに恐かった。全身の血液が一気に冷えていくような感覚、蛇ににらまれた蛙つてこんな感じなのか、とか思う余裕も無かつた。

でも、そこは適応能力の高い人間、実力がつくにしたがつて次第に殺氣にも慣れていき、自分から殺氣を出す事が出来るようになつていた。

彩「殺氣を出すにしてもずいぶんと殺る気満々だな?」

字は間違つてないよね? それくらいの殺氣は感じる。

幽香「安心して、命までは取らないわ。でも、負けたら私の奴隸になりなさい」

えー、なんだかすごいこと言われたような気がします。

なに? 贠けたら幽香の奴隸? 遠慮したいね、誰かに縛られるの嫌いだし。

彩「一応、理由を聞いてもいいかな? 何で俺?」

幽香「私は貴方が気に入った、それだけよ。妖怪は自分の欲に忠実なの」

そう言つて笑う幽香、目は笑つてないが。

人間の本能は警鐘を鳴らしている。

こいつはダメだ、勝てる相手じゃないと。

しかし、戦わずして逃げられるほど甘い相手でもない。

正直、恐い。いくら力があつても人間である以上妖怪には恐怖を感じ

じてしまつ。

でも、不思議と負けるとも思わなかつた。

幽香「さて、そろそろ始めましょ? こくわよッ! ...」

言い終わると同時に幽香が消えた。違つて、消えたように見えるへりいの速さで移動しているんだ。

能力を発動し、自分の時間の流れを早くする。周りの時間を遅くする場合とほとんど一緒にだが、いつのまつが燃費がいい。

幽香は背後から傘で薙ぎ払う動作に入っている。

幽香の背後に移動し、能力を解除した。

あ、靈力で身体能力を上げるのも忘れてないよ。

時間の流れが戻つたといひで、さつ今まで自分がいた場所を傘が豪音を立てて通過する。

うわっ、当たつたら即死だな。ソーックブーム起きてるし。

幽香は驚いたように目を見開き、そのまま距離を取つた。

幽香「貴方、いつたい何をしたの?」

完璧に捉えたと思ったのだが、少しばかり動搖が見える。

彩「この戦いが終わつたら、教えてやるよ」

そう言つて今度はこちらから仕掛ける。

が、本気では打ち込まない。

いつも容易く避けられ、カウンターとばかりに掌底が飛んでくる。腕の袖をとり勢いを利用し、合氣道で遠くに投げる。

かなり遠くまで飛んだが態勢を立て直す前に一気に距離を詰め斬りかかる。

が、それを傘で防がれた。

幽香「へえ、人間にしてはなかなかやるじゃない」

幽香が楽しそうに笑う。

彩「そいつはどいつも、幽香はこの程度なのか？」

対して、じぢらはわざと挑発する。

幽香「！・・・・ふふふ、ますます気に入ったわ」

幽香の姿がぶれた。さつきは普通の動体視力だったが今は強化しているので見える。

幽香が果敢に攻めてくるがそれをかわし、受け流し、距離を取る。けつしてこちらからは攻撃しない。まだだ、もつと遠くへ離れないと。不意に攻撃が止んだ。

幽香が苛立つたように、声を荒げた。

幽香「貴方、本気でやつていいの？」

どうやら、手加減していると思われたらしい。

幽香は少し失望しているようだった。

彩「ううん、これだけ離れればいいかな？」

幽香「？、何を言つて・・・！」

彩人たちがいる場所は、太陽の烟からかなり離れた森の上だった。

幽香「貴方・・・向日葵に被害が出ないようごわざと?」

彩「向日葵は、俺が好きな花の一つなんだよ。あんなに綺麗に咲いているのに傷つけたくないからね。た、そろそろ本気でやりますか?」

そう言って、スペカを構える。

幽香は傘の先端をこすりに向けて言った。

幽香「まだるつこじいのはもういいわ。全力でいくわよ?」

傘の先端に妖力が集まつていいくのが分かる。

それも、そんじょそこらの雑魚が束になつても、及びもつかない様な量と質だ。

だからこちらも、靈力と魔力を練り上げる。

ただ力任せに練るのではなく、一つが互いに寄り添うように調節しながら練り上げる。

俺も幽香も

互いの力の奔流が余波となつて干渉しあう。

二人は合図をあげるまでもなく同時に叫んだ。

幽香「魔砲『マスタースパーク』!..」

彩「薰風『桜花の嵐』!..」

幽香の先端からは、魔理沙と同じ極太のレーザーが射出される。だが、威力は桁違のだ。

対して俺は、突き出した手の平から桜吹雪を放つ。

桜花爛漫をレーザーのように放つ技だ。

さすがに、使い勝手が悪いので改良した結果がこれだ。
こちらの方が断然使い勝手と燃費が良い。

一つのレーザーはぶつかり合い、拮抗している。

幽香「クツ、アアアアアアアア」

彩「らあああああああ」

お互の全力がぶつかり合い、爆発が起きた。

同じ位の力がぶつかり合ったため、爆発したのだ。

幽香も俺も、互いに疲労困憊でこれ以上続けるのは少々無理があつた。

彩「今・・回は・・・引き分け・・・か?」

息も絶え絶えに言つ。

幽香「そ、そつ・・ね、今日はもつ・・・やめましょ」

幽香もそれに賛成なようだ。

そうと決まれば、さつさと神社に戻ろう。
疲れた・・・靈夢のお茶が飲みたい。

彩「じや、またな」

幽香「ええ、また」

幽香に別れを告げ、神社へ帰つた。

その日の夜・・・

風呂から上がり、自分の部屋に戻ると布団の上に咲姫と舞花が座っていた。

二人とも俯いていて表情が見えない。
不意に舞花が口を開いた。

舞花「私達、何のためにいるのかな?」

声が震えていた。

おそらく、昼間何も出来なかつたことで落ち込んでいるのだろう。
あれは、仕方ないと思う。
幽香に立ち向かう事が出来る奴がここにどれだけいるだろうか。
だから、別に気にしなくてもいいのだが・・・

咲姫「今回、私達は何も出来ませんでした。相手の迫力に呑まれ、
ただ、下がることしか出来ませんでした。」

二人の頬を零が伝う。

舞花からは嗚咽が聞こえてきた。

咲姫は嗚咽をかみ殺しているのが分かる。

俺は黙つて聞いていた。

咲姫・舞花「彩人さま・・・」

一人の声が重なると同時に初めて顔を上げた。

二人は捨てられた子犬のような瞳をしたまま・・・

咲姫・舞花「「私達は、貴方の傍にいてもいいのですか？」」

震えた声で、勇気を振り絞つて紡ぎ出した問い。

俺のためにここまで悩んで、苦しんで、自分自身を追い詰めて・・・
ああ、本当に愛しい奴らだ・・・

俺は一人に近づき優しく抱きしめる。

二人の体がビクッと震えるがそれも一瞬。

彩「「めんな、苦しかつただろ？辛かつただろ？でも安心しろ、咲姫も舞花もここに・・俺の傍に居ていいんだよ。いや、違う・・・
俺の傍に居てくれ」」

俺のために思い悩んで、それでも自分の隣に居ていいのか？と聞いてくれた少女達

俺は今最高に幸せだ。

だから、この愛しい少女達を優しくだけじつかりと抱きしめる。
絶対に離さないよう。

二人は堰を切つたように泣き出した。

俺は一人が泣き疲れて眠るまで、頭を撫で続けた。

幻想郷に紅い霧が蔓延し始めていた。

太陽の花そして愛しいモノ（後書き）

ここまでが序章です。

次回からいよいよ紅霧異変に入ります。

やつとか・・・長かつたな。

その前に、キャラ設定書くかも。

感想・意見要望など書いていただけたらうれしいです。

オリキヤラ設定（前書き）

オリキヤラ3人の設定です。
オリキヤラが増えると書き足すかも知れません。

オリキヤラ設定

名前：春疾咲姫

はるやみさき

年齢：？？？（見た目16歳くらい）

身長：162cm 体重：？？

細身だが健康的な体つきで出るといろは出でいる。

趣味：料理（修行中）、彩人と一緒に時間を過ごす事

容姿

艶のある黒髪を背中まで伸ばしている。黒目でかなりの美少女。青い浴衣を着ていて足の丈は太ももくらいとかなり短め。

性格

清楚で可憐が良く似合うが彩人が他の女の子と楽しげにしているとやきもちを焼いてしまう。でも、そんな心境を察してあとで相手をしてくれる彩人のことが大好き。

一応、主従関係にあるがそれでも彩人の傍に居たいと思つてゐる。

舞花とは姉妹でほとんど一緒に居ることが多いがよく振り回されるが、本人もまんざらではない。彩人に買つてもらった櫛が宝物でいつも肌身離さず持つていて。

能力：刀の付喪神で、刀、人型、刀の状態のままティン一ベル位のサイズで刀の周りに出ることができる。

剣の腕前はかなりのもの

名前：春風舞花

はるかぜまいにか

年齢：？？？（見た目15歳くらい）

身長：160cm 体重：？？

プロポーションは咲姫とほとんど変わらない。

趣味：料理（修行中）、彩人と一緒に遊ぶ事

容姿

茶色い艶のある髪が背中くらいまであり、それをポニー テールにしていてかなりの美少女。橙色の浴衣を着ていて足の丈は太ももくらいとかなり短め。ポニー テールに彩人からもらつた櫛を挿している。

性格

姉とは違ひ天真爛漫な性格で好奇心が旺盛。よく姉である咲姫と一緒に行動するが、そのたびに姉を振り回す。主人である彩人を慕つているが、初めて会つたときの家族といふ言葉に共感し、本当の家族のように接する。

姉と同じくらい彩人のことも大好き。姉と同じく、他の女の子と仲良くしていると嫉妬してしまうが、姉ほどではない。そのたびに、あとで構つてもらえるのであまり気にしている。

ずっと、三人一緒に居たいと願つている。

能力：刀の付喪神で、刀、人型、刀の状態のままティン一ベル位のサイズで刀の周りに出ることができる。

剣の腕前はかなりのもの

名前：涼風凪
すずかぜなぎ

年齢：116歳（見た目16歳）

身長：165cm 体重：？？

スレンダーな体系。

趣味：山の頂上でのんびり過ごす事

容姿

艶のある黒髪を肩くらいで切りそろえている。香霖堂天狗装束に似た服装をしている。

性格

天魔の孫娘にして、次期天狗の里のトップの座に居座る予定である。天狗にしては珍しく融通が利く、と言つより大雑把な部分がある。今はトップで無いにしろいづれは全ての天狗を率いる立場にあるため現代でいう英才教育を受けている。それが退屈で時折脱走しては、山の頂上でのんびりと過ごす事もしばしば。

彩人のことはとても気に入つており、たびたび会いに脱走を謀る。彩人の作る和菓子を食べることがマイブーム。とてもおおらかな性格をしている。

能力：【大気を操る程度の能力】

基本的に風を操ることに長けているが、その他にも気圧を操作して温度を操つたり小規模だが天候も操れる。

オリキャラ設定（後書き）

次回からやつと紅霧異変に入ります。
ここまでくるのに時間がかかり過ぎた。

感想・意見を待っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8001y/>

東方夢桜歌～A little tenderness and some courage～

2012年1月5日21時45分発行